注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
俺がアイツと戦えないのはどう考えてもお前らが悪い

【作者名】
魔法使い候補

【あらすじ】
真に最強なのは誰か？

ルールによる制約を取り払い

完全に公平な条件で戦ったとき

スポーツではなく…

目突き、金的アリの喧嘩で戦ったとき

真に最強なのは誰か？

今現在最強は決まっていない…

大和くんのー武勇伝、ぶゅーでん!!

「すみませんでした」

どこで間違えた？

「勘弁してください」

押せば倒れるような状態だったのに

「助けて下さい」

醜態を晒しながら謝罪している

俺が

今までぶっ飛ばしてきた

口だけの奴等より惨めに命乞いをしている

「助けて下さい」

いつも通りの一日だと

また勘違いした馬鹿が突っかかって来たと

「助けて下さい」

いつも通りに

捩じ伏せてやろうと
思っていたのに
「助けて下さい」
勝利は目前だと
思っていたのに
何故？
何で？
どうして？
傷が消え失せている!?
「助けて下さい」
「……」
アイツが
蔑むように
俺を見ている
『最初の伊勢の良さはどうした？』
『弱いクセに強いモノに楯突くからだ』
『本気で勝てると思っていたのか？』

何も口にしないが
俺を見下している目が
雄弁に語っている
見下されている
何も言わず
アイツが立ち去っていく
頭を上げる事ができない
悪態をつくことすら出来ない

どのくらい時間が経ったのか
声をかけられた
「このくらいなんともないから」
格好から判断すると

誰かが救急車を呼んでくれたようだ

でも今は誰にも構われたくない

「なんともないわけないだろ」

五月蠅(うるさ)いな

少し休めば一人で帰れるよ

「俺は全然大丈夫なんで、急病で苦しんでいる日本国民を助けて下さい」

大丈夫だから

こんな所で油売ってないで

もっと重症の人を助けに行けよ

「ふらふらしているじゃないですか？」

どこがだ？

しっかり地に足着いてるだろうが

プルプル震えている？

武者震いだボケ

「支えが無いと立っていられないくらいボロボロじゃないか」

ボロボロに見えるのはメイクだ

実際は蚊に刺されたくらいしか腫れてない

出血？返り血に決まってるだろ

「ほんと…に……大丈夫だから…さ…」

そう…本気(マジ)で…大丈夫だから

俺に構うな

構わないでくれ

放っておいてくれ

「ほら、無理じゃないか!!」

よろけたわけじゃない

少しふざけただけだ

俺が

「救急車で連れていくぞ」

俺が

俺が

俺が

「うるせぇ…」

俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が
俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が
俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が
俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が
俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が

「俺に触るんじゃねえ…」

あんな女に負けるわけ無え!!

これは夢だ!!

「俺は一人で立てる!!」

あんな細く小さい女に

殴られて立てないなんて

あり得るわけ無えんだ!!

「さわんじゃねえ!!!!」

目から鼻から水が流れる

止まる気配がない

上手く呼吸出来ない

涎(よだれ)がこぼれる

視界がボヤける

膝が笑い

手に力が入らない

ちきしょう

２００６年１１月８日（水）

今日俺は一人の少女に喧嘩で負けた

オラ強え奴と戦いてえ!!

直江大和
川神学園２年Ｆ組所属
父親の教育の賜物か、要領が良く頭の回転も速い。ただ、性格は母親の若い頃を彷彿とさせるくらい好戦的。喧嘩や争い事が絶えなかったが、噂を聞き付けた川神百代に負けてからは落ち着いている。現在はリベンジ画策中。

――――――――――――――――――――

『強い方が戦い守るのが合理的なのは分かってるのだろう？』

『男だから、女だからという考えは――』

『――今の時代ではナンセンスな思想だ』

川神学園
校訓は"切磋琢磨"
生徒達の個性、自主性を重視する自由な校則が特徴的な学校だ。ユニークな行事や授業は勿論、"決闘"という生徒同士の勝負を行うシステムがある。
決闘では互いの合意があれば、白黒つける戦いを行ってもよいと学校側が認めている。内容も喧嘩や論戦等様々で、人数による縛りも無い。

２００９年４月２０日（月）

あの屈辱塗れの敗北から約二年半。
俺はあの"川神百代"が通っている川神学園に進学し、無事2年に進級することができた。
今は島津寮から学園に通っている。それなりに知り合いも増えたので、武神に関しての情報収集を行っているが、思ったように集まらない。そこらの不良達相手ならともかく、一端の武人として挑戦を受けるときはギャラリーを排除してから試合をするからだ。仮に見れた人間に話を聞けても「何をしたのか分からなかった」という答えばかり。自分で観察するのも限界があるので、不安は拭えない。
鍛練の方は順調なだけに、非常にもどかしい。

『いくら努力しても勝てない奴もいる』

あの後、知り合いになった髭面のおっさん、宇佐美先生に言われた台詞だ。確かにその可能性はある。なにせ傷を一瞬で回復させるような奴だ。生半可な攻撃じゃ気絶させることすら出来ない。少なくとも、今の俺ではルールによる制約を受ける試合では絶対に勝てない。

『あのチート技が有る限り、お前では勝てない』

だが
ルールによる制約を受けない
何でも有りの
喧嘩なら？

決着が着くまで
止める者の居ない状況を作れたら？

本当に勝てないと言えるのか？

直江大和は考える
自分には気で波動を撃つことはできない
傷を一瞬で癒すこともできない
だからといって勝てないとは決まっていないと

２００９年４月２０日（月）
川神学園２－Ｆ教室

「起立！礼！」
「「おはようございます！」」
「おはよう！着席して良し」
「出欠を確認する。各自速やかに…
出欠確認が進んでいく、私語をするバカは居ない。
「今週の伝達事項だ。水曜日に朝礼、木曜日に人間力測定」
「以上。朝のホームルームはこれまで！」
クラスの空気が弛緩し、生徒達が話し出す。
『体罰の鞭が気持ちよかった』
『宿題写させてくれ』
『今日もモモ先輩すごかったね』等々

休み時間、昼休みでできる限り多くの奴等と談笑しつつ、武神に関する情報を聞いて回ったが、大した収穫は無かった。

２００９年４月２０日（月）　放課後
川神学園　空き教室

放課後は、空き教室で宇佐美先生に喧嘩について師事を受ける。宇佐美代行の仕事を手伝うことで、喧嘩のノウハウを教えてもらっているか（ｒｙ

「教えることが無くなったな」

「ハァ？」

「そもそも、オジサンは誰かに喧嘩の技術を教わったわけじゃないから」

「実戦をこなすことで、自分なりの戦い方を模索しただけだから」

「……」

「心構えや、スポーツ化された格闘技じゃ使えないような技術は全部教えた」

「後は自分で戦ってみて、自分で喧嘩を極めてくれや」

「いきなりそんなこと言われても困る。只でさえ練習相手が居ないのに、ふざけんな」

「そう言われてもねえ、中年のオジサンじゃお前さんの相手はしんどいのよ」

「そこら辺にいるチンピラじゃ、練習にならないことくらい分かってるだろ」

「そこは心配するな、良さそうな相手なら目星をつけてる」

「…誰よ？」

「お前さんも聞いたことはあるだろ、歓楽街の板垣姉弟だ」

「……」

「どうした？」

「そいつらがご親切に俺と喧嘩してくれるとは限らない」

「歓楽街周辺の不良はそいつらに取り纏められている」

「対峙した状態で喧嘩を初めれば、ほぼ確実に邪魔が入る」

「襲撃をかける形で喧嘩を吹っ掛ければ乱戦になり、一対一（タイマン）を想定した戦いの訓練ではなくなる」

「人が居ない状況を作る必要がある」

「……」

「何か策を考えないとな」

「じゃあ何か思い付いたら言ってくれ、オジサンでできることがあるなら手伝ってやるよ、一回だけな」

「ケチくせぇな」

「世の中ギブアンドテイクよ、じゃあ今日はもう帰った帰った」

２００９年４月２０日（月）　夜
島津寮１０２

（…板垣姉弟か。親不孝通りで暴れ回っているのは聞いていたけど、一対一で戦うのは難しいな）

あの一帯は柄の悪いチンピラや不良が多い、モラルや美学などあるわけない。囲んで袋叩きにしようとするだろう。それでは戦う意味が無い。

助っ人を呼んで、不良の相手を助っ人に任せる。駄目だ、助っ人の強さ次第では援軍を呼ばれたり、逃走を図られる。やはり人が居ない状況を作るのが理想的だ。

そうすると親不孝通りや歓楽街ではなく、人通りの少ない場所に誘い出すのが現実的か。こちらが喧嘩を売るのではなく、向こうに喧嘩を売らせる。

（そんな都合の良い方法があるか？）

親不孝通りのチンピラを片っ端から潰して回る？いや、一人で良い。板垣姉弟と連絡が取れる奴を一人、脅して呼び出させるか。

（……成功する確率は低いな、不確定要素がある以上何処（どこ）で計画がパァになるか分からない）

ここはやはり、あの髭に手伝ってもらい確率を少しでも上げる。手頃な奴を見繕(みつくろ)ってもらい、金でも渡して裏切らせる。
板垣姉弟を一人倒せば、残りの姉弟は俺に報復しようとする可能性も出てくる。上手く利用できれば一人ずつ戦える。報復を考えなくても、倒した奴から何らかの形で残りの姉弟に接触できる可能性は生まれる。

（そうと決まれば、早速髭に手頃な奴を探してもらうか）

三日後

２００９年４月２３日（木）

親不孝通り

「俺好みの男を見かけただと!?」

「ええ、そこのゲーセンの向かいのビル。ほら、建設途中のヤツのとこで」

「どんな奴よ?」

「女顔で髪が肩に掛かるくらい長いんですが、ガタイが結構良かったんですよ」

「１８０㎝くらいですかね、全体的に黒っぽい格好だったっス」

「そーかい、丁度ムラムラしてたとこだ。ちょっと抱いてくるぜ」

「人払いしておけよ」

「ウッス!!」

大和は"甘いマスク"を使った！
板垣竜兵が襲い掛かって来た！

レベル上げは廃人プレイの基本

宇佐美巨人
川神学園2年S組担任
川神学園で教師をしているが、本業は代行業を営んでいる。跡継ぎとして育てる為に、源忠勝の身元引受人となる。腕が立つが、普段はどこにでもいそうな中年男性といった感じ。大和には代行の仕事を手伝ってもらう代償に、喧嘩のテクニックを教えていた。

「お前がアイツらの言ってた男か？」

来た

獲物が罠にかかっていることに気付かずに

「確かに俺好みの容姿じゃねえか」

あまりに無防備

あまりに無警戒

「悪いが俺は男が好きでな、今からお前を抱くぜ」

罠は既に張ってある

俺が仕組んだ計画にハマっている

「良いぜ♪」

「お!?」

お前は既に

「俺に喧嘩で勝てたらな!!」

俺の掌の上なんだよ

一日前

２００９年４月２２日（水）

「思っていたよりかなり早かったな」

「忠勝が頑張ってくれたからな、明日にでも礼を言っとけよ」

「分かってる、頬にちゅーしてお礼言っとくわ♡」

やっぱりゲンさんは頼りになるな。女として生まれてたら惚れてたわ。既に俺の好感度は振り切っている。

「…いや、普通にありがとうでいいだろ」

この髭本当にゲンさんの里親代わりなの？あのＭｒ．ツンデレの魅力が分からないの？

「それよりお前が頼んでいた奴だけど、板垣姉弟の長男坊なら誘い出せそうなんだと」

「ふむ、板垣竜兵か」

まあそれなりに強ければ誰でも良いさ。目的はあくまで、一対一でどこまでヤれるようになったかの確認だ。

「板垣竜兵って奴はガチホモらしくて、今回目をつけた奴も強引に掘られたんだと」

「」

エ？（゜д゜）

「ボコボコにしてほしいんだって、まあ裏切られる可能性はかなり低いな。負けたら掘られるかもしれないけど」

２００９年４月２３日（木）
親不孝通り　建設途中のビル

「ハハッ、面白えこと言うなニーチャン!!」

「笑っていられるのも今のうちだぜ」

間隔は大体２０ｍ、事前の情報だと武器を使わず殴りにくるらしいが、何か武器に使えるモノを所持している可能性はある。まずはそれを確認する。

「そういう奴、嫌いじゃないぜ」

こちらへ歩み寄ってきた、距離を詰められる前に上着を脱ぎ捨てる。向こうもつられて上着を脱ぎ捨てた。インナーはタンクトップ、少なくとも上半身には武器になりそうなモノは見当たらない。

（やっぱり脱いだな）

見るからにプライドが高そうな男だ。同条件下で勝ったと俺に認めさせたいから、喧嘩が始まるまでは同調行動で誘導しやすいと思っていた。

仮に誘導できなくても、俺を抱くつもりで来たんだ。興奮状態で体温は高く、上着を脱ぎ捨てる確率は限りなく高い。

後は下半身、特に尻ポケットの確認をしたい。対峙した状態からは見えない位置にあり、武器を取り出しやすい。脇ポケットなどは、戦っているときは前屈気味になることが多いので、尻ポケットより取り出しにくい。取り出した後も腕を後ろに引いていないので、間が空き攻撃へと繋ぎ辛い。何より取り出す動作が丸見えだ。所持しているなら後ろしかない。靴に鉄板を仕込んである可能性もあるが、屋外で脱がせるのは難しい。こちらは蹴られないように警戒するしかないな。

「あまり粘るなよ、ボコボコになった顔じゃ萎えるかもしれねえ」

「ほざけ、ボコボコになるのはてめえだ」

対峙したままでは確認できない。せめて半身に構えさせて、視界だけでも確認しておきたいが良い策が浮かばない、ここは俺から仕掛ける!!

「二度と男を抱くなんて言えないように、睾丸潰しておんｎ」

会話を途中で切り、サイドステップの要領で右側から僅かに背中が

見える位置まで回り込み、蹴りの体勢に入る。ポケットの部分を見る。少し膨らんでいるが、あの程度なら財布の可能性が高い。

「!?」

会話に耳を傾けていたのか、奴の反応が一瞬遅れる。

深手を負わせる為の蹴りではない。野郎のケツ、正確にはポケットの中を確認する為の蹴り。あわよくば、体勢が崩れるのを期待しての蹴り。

ドスッ!!

「…?」

「チッ!!」

体勢を崩すことはできなかったが、確認はできた。十中八九財布、少なくともスタンガンや警棒などの武器ではない。

「おいおい、どこ狙ってんだ?」

嘲笑いながら板垣が言う。こちらの意図を悟らせずに済んだのも大きい。ここまでは計画通り。

「ケツなんか蹴っても痛くも痒くもないに決まってんだろ!!」

お返しとばかりに突っ込んできた、強引に殴り倒すつもりか?

「オラァッ!!」

大振りだが、正確に顔面を狙ってきた。連打されると面倒だ、前蹴

りで距離をとる。

「ぐぅ…」

「!?」

腹部に蹴りを入れられながらも、強引に打ち返してきた。体軸がブレないから、素早く次のパンチを繰り出してこれるのか。

何かヤっていた　というよりは、フィジカルが強いからか。ガンガン前に出てこられると対処が難しい。

「なんだよ、やればできるじゃねえか」

身長は俺と同じか、野郎の方が少しデカイ。体格差はほぼ無いと言えるが、俺は一度自分より小さい女にボコボコにされている。見た目で判断はできない。

「その調子でガンガンこいよ!!」

こいつに苦戦するようでは、アイツには勝てないどころか戦いにすらならない。俺にとってこの喧嘩は試金石、それを忘れるな。

板垣に何もさせずに倒す！

おっさんとの訓練を思い出せ!!

一年前

２００８年６月３日（火）

「喧嘩で勝つために一番必要なモノ？」

「そ、直江は何だと思う？」

「……」

「まあ各個人で意見は変わるだろうが、最も必要なモノとなれば攻撃性。敵を徹底的に攻撃できるかどうかだと俺は思う」

「どんな戦い方だろうが、結局はソレが必要になる。今の日本のような比較的治安が安定している国では特にな」

「人が人を攻撃するにはボルテージが必要だ。比較的殴り慣れてるヤクザやチンピラでも、ある程度は必要になる」

「ボルテージが足りないまま攻撃しようとしても、意識的に力をセーブしてしまう。ケガをさせてしまったらどうしよう、という感じで」

「じゃあどうするんだよ？」

「お前さんには、ボルテージを上げる良いオカズがあるだろ？」

「!?」

「復讐を誓う程、殺したいと思う程、憎い奴が」

「……」

「脳には心理的限界（サイコロジカルリミット）がある。無意識に自分の力を抑制するはたらきがある。このリミッターを外す為にそいつを使う」

「殺したい奴のことを思い出せ、死ぬ直前の映像を想像できるようになれ」

「できるようになれば、自分自身で大量のドーパミンが出せ、一瞬とはいえリミッターを外せる」

「ボルテージも否応なしに上げられる」

「使いどころはよく考えろよ、リミッターを外した人間は一般の女性が車を持ち上げるくらいだ。下手すりゃ相手が死ぬ、火事場の馬鹿力を甘く見るなよ」

「……」

２００９年４月２３日（木）
親不孝通り　建設途中のビル

板垣は様子を見ている。痺れを切らす前に俺から仕掛け、一気に勝負を決める。勝算は既に考えている。

俺はボクサーのように拳を顎の前に構え、一歩踏み出しジャブを打つ要領で左の拳を開きながら繰り出す。

「なっ!?」

フィンガージャブで板垣の両目を狙うも、勿論ガードされる。だが、板垣の視界を左手に集中させることに成功。本命は両目を潰すことではなく、視界から外した足による…

金的!!

ドズッ!!

「ぁが!?」

きれいに金的が決まり、板垣が前屈みになる。頭が下がり、両手が股間へ。がら空きの両耳へ…

イヤーカップで鼓膜を破る!!

パァン!!

そのまま左耳を掴み、引き倒してマウントをとる。気絶しているように見えるが、徹底的にやる!!

俺が絡んでくるように仕向けた為罪悪感が少し湧いたが、あの女が俺を見下している映像を想像する!!

『弱いクセに強いモノに楯突くからだ』

【ぶっ殺してやる!!!】

ゴォン!!

渾身の頭突きで鼻を潰す。

ゴォン!!

（マウントをとったら一気に決めろ）

ゴォン!!

（マウントで時間を掛ければ掛けるほど逆転される確率が上がると思え）

ゴォン!!

（ちまちま削るのではなく、一発で壊すつもりで打て）

グチャッ!!

（敵に行動させる間を与えるな）

……

２００９年４月２３日（木）
親不孝通り　建設途中ビル前

「もう終わったかな？」

「板垣竜兵がビルに向かってから一時間近く経ったし、どちらに転んでも終わってる頃でしょ」

「それにしても、本当に美味い話だったな」

「ああ、まさかマジで誘導しただけで金が貰えるとはな」

「負けても、戦ってる奴は俺らの顔も名前も知らねえし、万が一勝ってくれれば溜飲が下がる」

「ノーリスクハイリターンとはこのことだな!!」

「お、そろそろ聞こえるかもしれねえ。気を付けろよ」

「ウェーイ!!」

「竜兵さーん、まだやってんスかー?」

「もう日が変わりますよー、続きはホテルか家にしm」

「誰か発見♪倒れてるしー、満足するまでもたなかったんかな?」

「しょうがねえな、さっさと竜兵さん見つけて救急車呼んでやろうぜ」

「ちょっと待ってー、どんな面してるかはーいけーん♪」

「エ?」

うわぁあああああああああ!?

大和は板垣竜兵を倒した!

ちゃらららっちゃっちゃっちゃーん♪
大和はレベルが上がった！
大和は"リミッター解除"を覚えた！
大和のちからが1上がった！
大和のかしこさが2上がった！
大和のやさしさが4下がった！

戦う前に勝て!!

源忠勝
川神学園2年F組所属
児童養護施設"白い家"出身。
最高のツンデレにして健康的な不良（笑）
あまり他人と関わらない、一匹狼な性格。攻撃的な態度や荒々しい口調ではあるが、面倒見は良い。大和とは高校からの付き合いだが、面倒見が良いせいか非常に懐かれている。好きな女の子はやっぱり川神一子ちゃん!!
ゲンさんルートはよ、はよ（ゞ（ゝ・ω・、）

２００９年４月２４日（金）
川神学園２―Ｆ教室

「おはよう、ゲンさん。先日はありがと♡お礼にキッスw「いらねえ、朝から気色悪いこと言ってんな!!」デスヨネー」

昨夜の喧嘩は理想的だったと思う。事前に情報を入手する事ができ、相手に気取られることなく、俺に都合の良い場所へ誘導できた。出来る限り早く武器の有無を確認し、倒すべきところで倒し切ることができた。少しやり過ぎた感じもするが、それはリミッターを外すことに成功したということでもある。実戦で外したのは初めてだが、予想以上に抵抗感が無くなった。確かに使いどころは慎重に選ぶ必要があるな。

「それで？」

「ん～？」

「次の相手はどうするつもりなんだ？」

「…エ？手伝ってくれるの？」

「勘違いするんじゃねえ、これも仕事の範囲内なんだよ」

「ありがと～♪まあ向こうの出方次第で変わるから、しばらく様子見しつつ罠を張る作業になるね」

一応喧嘩を売られた（？）形にしたとはいえ、逆ギレして絡んでくる可能性も無い訳ではない。歓楽街で暴れ回るような連中だ。むしろ好都合とばかりに、俺に因縁をつけてくる可能性が高いと言えるだろう。どんな状況に陥っても切り抜けられるように、準備しておくのが最優先だな。

「そう「よー、大和!!ゲンさんもおはよう!!」…続きは放課後だな」

「分かった、じゃあ放課後に。それと、おはよう翔一。今日も元気だな」

「オウ、今日は転校生も来るからな!!元気に出迎えてやらねーと」

アー（。ロ。）

そうだった、すっかり忘れていた。まあ深く関わる予定も無いし、別に気にしなくてもいいか。

「そんな事より、いい加減俺らのファミリーに入れよー!!長い付き合いだろー」

「ま～だ言ってんのか。入らねえって」

入るわけねえ～だろ!!あの女と会ったらどーすんだ!?想像もしたくねえよ!!翔一はぶつくさ文句を言っていたが、そのうち自分の席に戻って行った。

……P．S．オッサンが補強されなくて本当に良かった（；´Д`）

２００９年４月２４日（金）　放課後
川神学園空き教室

「さて、今後の方針だが此方から動かなくて良いのか？」

「俺はゲンさんと二人で打ち合わせするつもりだったんだけど」

「そう邪険にするなよ。オジサン悲しくなるから」

「そんな事より、本当に向こうの出方を待つのか？此方から仕掛けた方が…」

「情報が少なすぎるんだ、板垣姉妹がどんな性格なのかも大雑把にしか分かってないし」

（今のところ…
長女：ドＳ
次女：寝坊助
三女：ゲーム好き
コレくらいしか知らねえしな）

親不孝通りの不良やチンピラも、あまり関わらないようにしてるらしいし。

「まあお前さんは戦う前に出来る限り勝率を上げてから仕掛けるタイプだし、出たとこ勝負は極力避けた方が良いわな」

「となればやはり…」

「罠を張りつつ、逃走手段も用意しておきたいんだよなぁ。勝てるとは限らないし、世の中には気を感じて追跡してくる奴もいるから。それで追いつかれてボコられたことあるし。」

「心当たりが多すぎて、笑い飛ばせないのがツラいな。」

愚痴ってても仕方ない。罠を張る場所、逃走手段の手順など考えなければいけないことは多いんだ。

「じゃあまず罠を張る場所なんだけど…」

武神への道は遠く険しい…

２００９年４月２４日（金）　夜
板垣家

「あ、おかえり亜巳姉。どうだった!?」

「思っていたより酷いケガじゃあないみたいだね。鼻骨骨折と鼓膜の損傷、あとは顔面が打撲で腫れてるくらいだ。一応精密検査を頼んでおいたけど、後遺症とかは残らないだろうって」

「そっか、良かった」

「まあ竜兵の方は医者に任せるとして、こっちは加害者にケジメを取らせないとねえ」

「加害者っていうか、向こうが被害者の可能性のが高いと思う…」

「確かに救急車を呼んでくれた連れの話を聞くと、無理矢理抱こうとして返り討ちにあったみたいだけどね。あそこまでボコボコにしておいて謝罪すら無いのは癪だろ？」

「なんだか面白そうな話してるじゃん♪」

「あ、師匠来てたんですか？」

「いや、さっき来たとこ。それよりその話、詳しく聞かせてくれよ」

「はい、実は…」

「ほー、竜兵がねえ」

「ええ、それでこれからその「なあ？」…何でしょう？」

「その男なんだけど、俺がヤって良いか？」

「エーー!?師匠が戦うのー!?」

「何だ、駄目なのか？」

「駄目という訳では…」

「一応お前ら俺の弟子になるし、任せっぱなしだと師匠としての面子が立たねえからな」

「…分かりました、見つけたら連絡します」

「流石、話が分かるね」

２００９年４月２５日（土）
歓楽街　廃ビル

「ここならどうだ？取り壊しが数年前から止まっている、再開する様子も今のところない」

少々埃っぽいが戦うには十分なスペースがあり、何より人通りの多いエリアから程よく離れているのが良い。流石によく理解している。

「良い感じだね、じゃあゲンさんはタクシーの件をお願い。俺はここで罠を張っとくから」

敵がいつ仕掛けてくるか分からない以上、一刻でも早く終わらせたい。

「了解。何かあれば連絡する、気を付けろよ」

「分かってる、そっちも気を付けてね」

さて、逃走手段の確保はゲンさんに任せて、俺はトラップの設置に

取り掛かりますか。
…やっぱり電気、水道は止められてるな。となればコレをここに…

２００９年４月２５日（土）
親不孝通り　ゲーセン前

「どうでした？何か手掛かりとか…」

「それがよ、最近ここらで見慣れねえ男をよく見るんだってよ」

「女顔で長髪、身長が１８０くらいの男。人通りの少ないとこでよく見かけるんだってさ」

「　よくそんな情報手に入れられたねえ、天。じゃあその風貌の男を手分けして探そうか」

「そういえば、辰子の奴は来てねえのか？弟がヤられたって聞いたら、真っ先に敵討ちに行きそうなもんだが」

「竜兵の病室で待機させてます。放っとくと見境なく暴れ回りそうだったので…」

「そいつがイイ、万が一俺が負けそうになったら呼び出してくれよ」

「負けそうになったらって、師匠…」

「アッハハハー!!冗談だ冗談、本気にするなよ♪」

「なあ～、早く探しだして終わらせようぜ～。ウチもう面倒でしょう

がねえよ」

「あらら、俺が獲物横取りしたから拗ねちゃったかな？」

「べっつにー、早くゲームがしたいだけですよー」

「そっか。じゃあ手分けしてとっとと見つけちまうか」

２００９年４月２６日（日）　深夜
親不孝通り　路地裏

（なかなか出くわさないな。髭に聞いた話じゃ、向こうも俺を探してるらしいんだけど）

昨日罠を張り終えて、逃走手段の方も確保できたから出向いて来たのに。流石に平日も深夜徘徊する元気は無い。只でさえ木曜日も夜更かししているんだ、今日戦えなければゴールデンウィークまでは出歩かない。

（手分けして探してるみたいだし、一対一で戦える数少ないチャンスなんだ）

何としても今日中に一人は倒しておきたい。それも、できれば一番強い奴を。敵の数は少しでも減らしておきたいが、二人も倒されたとなれば一人で戦おうとする確率はかなり下がる。ほぼ確実に二対一、若しくはそれ以上の人数相手に戦う事になる。なら強い奴を先に倒しておければ、後々楽になる。

（やっぱりドＳと聞く長女が一番強いのか？それとも妹のどちらか？

こんなことならあのホモ野郎に吐かせとけば…）

「よー、そこのニーチャン。ちょっと良いか？」

…？柄の悪いオッサンに呼び止められた。初めて見る顔だが、やけに目付きや雰囲気が悪い。ヤクザかな？

「どうされました？何かトラブルでも？」

爽やかに受け答えることにする。無視して因縁をつけられるより、適当に相手して丸め込んだ方が良いとの判断だったんだが…

「いや、ちょっと人を探してるんだけどよ。ニーチャンに聞きたいことがあってな」

雲行きが一気に怪しくなった。俺の警鐘がガンガン鳴っている、一刻も早く離脱するべきだ。

何故こんなに警戒しているのか、自分でもよく分からないが理由なんて後回し。今は本能に従って出来る限り早くここを離れる。

「手短に済ませてもらえますか？」

「ああ、聞きたいことは一（ひと）つだ」

オッサンの雰囲気が変わる。そこで俺は何故自分が過剰に警戒していたのか思い知った。

「板垣竜兵をヤったの、お前か？」

このオッサンが

あの糞女と

同じ表情をしていたからだ

大和は廃ビルにトラップを仕掛けた！
大和は作戦・逃げるが勝ち!!を覚えた！
大和は怪しげなオッサンに絡まれた！

俺はタクシーを召喚するぜ!!

釈迦堂刑部
元川神院師範代だったが、精神面の問題を克服できなかったとして破門される。その後、政府の諜報員として活躍するが辞職し、今は無職。
現在は板垣姉妹の素質を見込み、武術を教えている。

―――――――――――――――――――――

川神院には嘗(かつ)て二人の師範代がいた
一人は現在も師範代を務めているルー
もう一人は既に破門された釈迦堂
優しく努力家なルーと
才能に恵まれ実力を重視する釈迦堂
二人は結局相容れる事なく雌雄を決する
獣のような男は自分の力を持て余し
裏の世界で猛威を振るう
２００９年４月２６日（日）　深夜
親不孝通り　路地裏
「板垣竜兵をヤったの、お前か？」

このオッサンが何者かは知らないが、川神百代とダブった時点で俺の方針は決定した!!板垣竜兵の名前を口にしたんだ、まず板垣姉弟側の人間だろう。変に怪しまれるのは最悪、無関係を装ってこの場をスマートに離れるのが理想、もし戦う事になればあの廃ビルまで誘導するのが絶対条件。これはただの勘だが、俺では真正面から戦ってたら確実に負ける。情けない、ビビってんのか?俺が!?

「まさかぁ、俺みたいな一般人が敵うわけないじゃないですか」

上手く答えられたと思う。冗談でしょ、といった感じで。我ながら愛想笑いには自信がある。

「そっかー、悪かったな。引き留めて」

「いえいえ、それでは俺はこれで」

よし!!良い感じだ。だがまだ焦るな、オッサンの姿が見えなくなるまでは急ぐな。ダッシュでここを離れるのではなく、近くのタクシーにでも乗ってスマートに離れる!!相手に不信感を与えないことを最優先に!!

そう段取りを決め、背を向ける。そして速くもなく、遅くもない速度で歩き出そうとしたとき…

嫌な予感がした

まるであの日

勝利を確信したあと

無様に敗北したときのような

理屈なんて無い。強いて言えば、今まで培ってきた経験から導き出した結論。聞いていた特徴に該当する奴がいたから呼び止めた。質問でもして確認する。結果は当然シロ。ここで肯定する奴はいないだろうが、少なくとも表面上は怪しいところは無い。

だが、どうしても気になる。受け答えも完璧、オカシイところなど一ヶ所たりとも無いのに。だからこそ不自然、例えるなら詐欺師のような胡散臭さを感じた。

(諜報員をやってた頃を思い出すぜ、居たよなあ息をするように嘘をつく奴)

標的は既に背を向けて立ち去ろうとしている。慌てず騒がず、ごく自然な速さで。よくやるぜ、普通の奴なら疑う事無く立ち去れただろうが…

(悪いが俺は、手を出してから確かめるタイプなんだよ)

確証は無いが、自分の勘に従って仕掛ける。もはや合ってるのか間違いなのかさえどうでもよくなっている。せっかく面白そうな奴を見つけたんだ、逃がすものか。

標的を捕まえようと

釈迦堂は手を伸ばした

が

突如振り返った標的に蹴り飛ばされた

嫌な予感がした。ここにいるのがこのオッサンではなく、川神百代だったとしたら。このまま立ち去らせるなんてあり得るだろうか？恐らく確証を得ぬまま攻撃するか、逃がさぬよう捕まえようとするか。どちらにしても、大人しくここを離れる事ができないのは間違いない。

もしこいつが

川神百代と同類の

戦闘狂（バカ）だったら

これは賭けだ。杞憂かもしれない、俺が気にし過ぎなだけかもしれない。何も起こらないという自分に都合の良い甘い幻想、余計なことをして状況を悪化させるだけなのではという危惧、それらを捨て去り自分の直感を信じる!!今俺が一番やってはいけない事は、何の根拠も無い自分に都合の良い展開に期待する事だ!!

そう結論を出し

俺は

振り向き様

敵を蹴り飛ばした

ドガッ

「チッ!?」

（この近距離からの蹴りを、片腕でとはいえ防ぐのかよ!?）

やっぱり俺を捕らえようとしていたのか、右腕が俺に向かって伸びていた。咄嗟に左腕でガードし、威力を殺すため後ろに飛ぶなど、明らかに素人じゃない!?だが、距離を開ける事には成功した。前もって開いていたゲンさんの番号にワン切りする。

（指定していた場所まで約２００ｍ、ダッシュで２０秒弱ってところか）

折り返しでワン切りしてくるまで時間を稼ぐ。出来る限り無傷でいたいが、最悪重傷だけは避ける!!俺の勝負所は此処じゃない、何としてもあの廃ビルに誘い込む。

「やるじゃねえか坊主。お前の嘘（ブラフ）、いい線いってたぜ」

やはり見抜かれていた、洞察力もかなりのモノと見て間違いない。経験、技術、場数、全て俺より上なのを感じる。俺が勝つには、策を使ってそれらを活かせない状況を作る必要がある。

「…あんた、何者だ？」

馬鹿正直に答えるとは思っていない、会話で少しでも時間を稼ぐのが目的。仮に答えたとしても確かめる時間が無い、少なくともこの喧嘩では役に立たないと思われる情報。だからこそ答える可能性は低いながらも有るが…

「俺か？…勝てたら教えてやるよ!!」

そう言いつつ此方に駆けてくる。まあこれからぶっ倒そうとしている相手に教える訳無いわな。

「俺が勝ったらって、それじゃお前口がきけなくなってるだろうが」

悪態をつきつつ、サークリングで一定の距離を保つ。殴りに来るか？蹴り？それとも掴みに来る気か!?狙いが絞れない!!

「ハッハッ♪面白え、やってみろ坊主!!」

右腕を引きながら此方に踏み込んで来る!!生半可な攻撃じゃ止められない、回避に専念しろ!!

「川神流、無双正拳突き!!」

「!?」

コイツ、川神院の技を!?的の広い胴を狙った拳を、かろうじて肘で防ぐ。が、勢いは殺せず数m吹っ飛ぶ。マジで痛え、後でボコボコにしてやる!!

「よく反応できたなオイ、その調子で頑張ってくれよ」

追撃を掛けに来た、会話で時間を稼ぐ隙もない。だが、奴が川神院の技を使える事が分かったのは大きい。傷を一瞬で癒せる奴がゴロゴロいるとは考えたくないが、否定はできない。

（ここは危険を犯してでも確かめる!!）

追撃を避ける為、バックステップで更に距離を開ける。十分に反応出来る間合いを保つ。

「下がってばかりじゃ捕まっちまうぞ」

確かに狭い路地裏で下がってばかりでは、すぐに壁に追い込まれるが、俺が下がったのは何も追撃を避ける為だけじゃない。あの技を使えるか確認する為には、頭部へ出血するくらいの傷を与えるのが理想的。より狭く行動範囲を限定し、回避と防御が困難な場所へ誘い込んだ。当然、俺が攻撃を受ける確率も上がるが、それでも今は確認を優先する。両腕を下げ気味にし、半身に構える。

「誰がてめえみたいなオッサンに捕まるかよ、寝言は寝て言え」

このオッサンも、自分の実力を疑わないタイプだろう。これまでの言動からしても、戦う事に楽しみを求める戦闘狂と見て間違いない。だったら此方の誘いに乗ってくる確率はかなり高い。罠の可能性が有ってもねじ伏せようとしてくるだろう。

「上等だ、簡単に倒れるんじゃねえぞ!!」

人が二人通れるくらいの狭いスペース、投げ技や絞め技を仕掛けるには狭すぎる。まず間違いなく打撃でくる、その打撃もこれだけ狭いとかなり限られてくる。先程のような正拳突きか、前蹴りやタックルで倒してマウントを取りにくる。何れにせよ直線的でリーチの長い打撃か組んでくる!!加えて俺の構えは顔面か膝くらいしか有効部位が見えない。更に狭いスペースでは、心理的に蹴りが打ちづらくタックルも仕掛けにくい。確実に顔面へ殴りかかってくる!!

（ハイ、馬鹿が引っ掛かった）

予想通り、左の上段順突きで顔面を狙ってきた。下げ気味だった左腕を、肘から先だけ振り上げる感じで弾く。逆突きが届かないように、左足を相手の左足の外側へ踏み込み、左腕の外側へ回り込む。左手でシャツを掴み引き寄せながら右肘でカットを狙った肘打ち!!

スパッ

「!?」

そのままの勢いで位置を入れ替える。かろうじて肘が掠り、なんとかカットできた。それにしてもコイツ、首を捻って避けようとしやがった。もう少し早く反応されたらカットすらできなかったな。まあこれで確認できる。頭部は派手に出血する、目に血が入る前に止血しようとするだろう。

「素敵なメイクだぜ、オッサン」

(使えるのか、使えないのか?)

「まさか出血させられるとは、お前イイな!!」

止血しない、少なくとも一瞬で癒せる技は使えないと判断する。後は廃ビルへ行き待ち伏せる、恐らくコイツも、ある程度の距離なら気を辿って追跡できる。誘い込むのは容易い。

ヴゥ

ゲンさんがワン切りしてきた、指定した場所まで急いで行く。

「悪いがここまでだな、サラバだ!!」

「!?」

振り返り駆け出す!!オッサンも逃がさぬよう追いかけてくる!!死ぬ直前をイメージしろ!!

"リミッター解除"

劇的に速くなる訳ではないが、しないより速くなるのは確かだ。２００ｍなら数秒はタイムが縮む。

（あと、１００ｍちょっと）

オッサンもなかなか速い。中年のクセに、何処にそんな体力が有るんだよ!?

（５０ｍ切った）

見えてきた、ゲンさんがタクシーのドアを開けて待っている。あ、こっちに気付いた。

「急げ、捕まるぞ!!」

叱咤されながらも走る!!心臓が凄い動いてるのが分かる。転がり込むように乗った直後、タクシーが勢い良く発車する。

「さっき言った場所まで急いでくれ」

バテバテの俺に変わって、ゲンさんが目的地を伝えてくれる。勝負はこれからだ、気を引き締めないと。

「やるな、アイツ」

まさかタクシーまで用意してやがるとは、認識を改める必要があるな。竜兵の件も、仕組まれていた可能性が有る。

（窮地に陥っても切り抜ける術に長けている）

気を辿れば追跡できるが、まず確実に罠が張ってあるだろう。どうする？追うか？

（考える迄もないか、強い奴と戦いたかったんだろうが、俺は）

大和は"ワン切り"を使った！
タクシーが現れた！
大和はタクシーに乗って逃げ出した！
怪しげなオッサンは大和を追いかけた！

攻撃こそ最大の防御？

川神百代
川神学園３年Ｆ組所属
川神院の跡取り娘にして、武神と呼ばれるチート美少女。ぷろろーぐで大和くんボコってたのもこの娘。戦闘を楽しんでおり、戦う事に飢えている。大和くんの悪評を聞き喧嘩を売るも、武術家では無いと舐めていた油断を突かれ、罠に嵌まり敗北寸前まで追い詰められた。が、一瞬で傷を癒す瞬間回復で形勢を逆転し、その後は一方的に殴り勝った。まだまだ満足していないのか、今も強い奴を探している様子。

２００９年４月２６日（日）　深夜
歓楽街　廃ビル

パキッ　ガシャガシャ

（来たな、ガラスを踏み潰す音が聞こえるぜ）

人間の集中力は長く続かない、近くに来れば気付くよう階段に細工を施した。割った窓ガラスを階段に撒き散らし、音を立てさせるように仕向けた。無論、踏まずに登って来れないよう、隙間は作って無い。

（タイミングがシビアだが、合わせる為の準備はしてある）

ドアから俺の待機している場所まで、約１０ｍといったところだ。オッサンがその気になれば、一気に間合いまで詰められる距離だろう。だから足を止めさせる為に、ドア周辺まで空き缶を散乱させている。さっき俺にしてやられている上に、廃ビルから移動しようとしないとなれば、間違いなく罠を張っていると警戒する。

（ガラスは探知機代わりの壱の罠、空き缶は撒菱（まきびし）代わりの弐の罠、参の罠で目を潰す!!）

（このドアの向こうに居るな）

階段に割ったガラスを撒き散らしやがって、やはり待ち伏せてやがった。確実に罠が張ってあるだろう。

（ここまで狡猾な奴は初めてだぜ）

俺では考え付かないような戦い方をしやがる。もっと俺を楽しませろよ、ガッカリさせるんじゃねえぞ。

ガチャ

「遅えよ」

正面の方から声を掛けられる、約１０ｍ先に腕を組んで立っている。奇襲をかけるんじゃないのか？

（……？）

足下に空き缶が散乱している、何だこ…

「!?」

釈迦堂が自分のミスに気付いた直後

強烈な光が襲い掛かった

ガチャ

（此処から集中、しっかり観察しろ!!）

ドアが開いたら此方から声をかけ、俺に注意を引き寄せる。すぐに仕掛けるつもりが無いと思わせる為、腕を組み仁王立ちの体勢で観察する。

「遅えよ」

一旦意識を俺に向けさせ、周囲を観察する余裕が有ると誤認させる。次に目を向けるのは、俺の足下まで散乱している空き缶。空き缶は足止めの他に、視線を俺から外させる為の罠でもある。

（この廃ビル周辺は店は勿論、車が通る事も滅多にない。瞳孔は既に開いているだろう）

視線が俺から下にズレた、この瞬間袖に忍ばせていたフラッシュライトを手に取る。フラッシュライトは護身用のグッズとして広まっているが、中には軍隊や警察の非殺傷用の装備として販売しているメーカーもある。俺のフラッシュライトはそこまで本格的な物ではないが、光の強さやメーカーの信用度は高い物を選んだ。数分はまともに視界がきかないだろう。

（空き缶に視線を移して、2秒以内に視線を俺に戻す。そこを狙う!!）

釈迦堂の視線が下へ移り
再度大和を視界に収めようと
顔を上げた瞬間
強烈な光が両目に飛び込んだ
「!?」
「ッシャア!!」
空き缶を1個拾い上げ、散乱した空き缶を蹴飛ばしながら間を詰める。詰めながら先程拾い上げた空き缶を顔面目掛けて投げつける。
カァン
（よし、反応出来てない!!）
飛んできた缶に全く反応出来てない、完全に目を眩ませる事に成功したと判断する。多数の空き缶がぶつかる音が邪魔で、俺の位置も音で判断出来ないハズだ。完全にタイミングを外した!!

２００８年7月2日（水）
川神学園空き教室

「そういえばさ、お前さんどうやって武神に勝つつもりなんだ？」

「ん～？」

「何度も傷やダメージを回復されたら、まともな打撃じゃこっちが先に潰れる、絞め技や関節技もヤバくなれば自爆で吹き飛ばすような奴だろ？」

「決定力に欠けるだろ、今の戦い方じゃ」

「…一発で倒す方法を考えている」

「へえ～」

「心臓を強打する事で失神させる」

「おい、それは…」

心臓を強打する事で、血管迷走神経反射性失神と心臓性失神の二種のダメージで、一瞬で失神させる方法が今のところ一番有効的だと考えている。

（まあ、心臓震盪（しんぞうしんとう）を起こして心室細動で死ぬ可能性もある、危ねえ方法だけど）

心臓震盪は、あるタイミングで衝撃が心臓に伝わる事で心室細動を誘発する。タイミングとは心電図上のＴ波の頂上の１５～３０ミリ秒前。まさに一瞬で狙って起こせるモンじゃないが、運が悪ければ起こってしまう程度には発生している。実際野球などのスポーツでも、子供の胸にボールが当たって突然死しているケースもある。起こりやすい部位、心臓の直上に当たる事で発生したケースが殆どではある

が、周辺の部位も極端に確率は下がるとはいえ、起こってしまう可能性はある。

「殺してしまうんじゃないのかってこと?」

「…分かってて言ってんのかよ」

「当然、打つさ。勝つために」

２００９年４月２６日（日）深夜

歓楽街　廃ビル

完全に視覚は潰した!!空き缶が顔に当たった事で頭部を警戒している、両腕が上がっている今が千載一遇のチャンスだ!!

（駆け寄った勢いを殺さず、心臓部分に蹴りをブチ込む!!）

視覚を潰し、聴覚も雑音で役に立たない、胸部もがら空きにさせた、確実に決まる!!

三重の罠による奇襲

完璧に決まると思われた蹴りは

釈迦堂の両腕にしっかり防がれた

完全にヤられた、自分のミスもあるが完全に奴の策に嵌まった。体勢を見て、周囲を確認する余裕が有ると思い込んでしまった。絶対に奴から目を離してはいけなかった!!

カァン

(!?)

反射的に頭部を守ろうとする。目が使えず耳も空き缶がぶつかる音で大して役に立たない。こんな状態では防げると思えないが、考えている暇も無い。

(アレを使うか…)

こんな坊主相手に本気になるとは、また鍛練した方が良いかな?

(…無明白刃取り!!)

ドガッ

「グッ!?」

「!?」

(何故、防げた!?目は見えず、雑音で俺の位置も把握出来ない、何より完全に攻撃されるタイミングを見失ってただろ!?)

「残念だったな、俺は殺気を感じ取る事で攻撃を防げる」

（糞が!!仮にそれが本当なら、目を潰しても何の意味も…？）

待て、何故奴は攻撃してこない？まともに戦えば勝てると分かってるハズだ。それに空き缶には反応出来なかったじゃないか。

（防ぐ事は出来ても、視覚が使えないと攻める事が出来ないと判断するべきだ）

それに、全ての攻撃に反応出来るとは限らない。殺気を感じ取れない攻撃には反応出来ないのではないか？例えば、さっきの空き缶のような、ダメージを与える為ではなく注意を逸らすような攻撃。

（殺気が何なのか、イマイチ分からないからイメージ出来ないが、視覚が回復したわけではないハズ）

ならば、視覚が回復する前に出来るだけダメージを与える。攻撃し続ける、掴まれないように細心の注意を払え!!

カン　カラカラ　コォン

散乱した空き缶を隅に蹴り、充分なスペースを作る。攻撃し続ける事で隙を作る!!

左上段順突き、左手で止められる
右上段逆突き、スウェーで避けられる
左中段廻し蹴り、右肘で止められる
右下段廻し蹴り、カットされる
左裏拳、左手で止められる
右中段正拳突き、右手で止められる

右上段孤拳、左手で止められる
左背足蹴り上げ、両足を閉じて止められる
上段頭突き、左手で止められる
左中段鉤突き、右肘で止められる

（打撃じゃ崩せないのか？）

右肘でガードしたときに若干前屈みになったところを狙って、首相撲に持ち込む。更に前に引き寄せ…

右膝蹴り、両腕で止められる

（打撃は完全に防がれた、ならば…）

首をロックしていた両手を外し、左手で右耳を掴み右の肘打ちで引き倒す!!

（マウント取って一気に決める!!）

"リミッター解除"

両腕を足で押さえつける形でマウントを取る。これで上体を反らして、全力で頭突きが打てる!!

ゴオン

（この体勢なら防げねえだろ!!）

ゴオン

（このまま終わらせる!!）

グチャ

ふと見ると、オッサンの目が開いている。もう回復したのか？

「やるな、ここまで躊躇せず攻撃するとは、まだ舐めていたみたいだ」

「もう目が使えるのか、だがこのまま何もさせずにブッ潰す!!」

もう一度頭突きをブチ込もうと上体を反らした瞬間、後頭部を蹴られた。

「クッ!?」

威力は無いが、前のめりになり慌てて腰を浮かした。両腕を押さえつけていた両足が少し浮いてしまった。その隙に両腕を抜かれて、太股の裏を押しながら股下を潜り抜けられた。

（ちきしょう、マウントから逃げられた!!）

急いで後ろを振り返る、オッサンも起き上がりかけている。先手を取れ、受けに回るな!!此方から仕掛けない限り活路は無い!!

右上段廻し蹴り、左腕で止められる

左上段逆突き、右手で叩き落とされる

左下段廻し蹴り、バックステップで避けられ、更に反撃される

「川神流…大蠍撃ち!!」

「ガハッ!?」

咄嗟に右足で後ろに跳んだが、大して威力を殺せなかった。かなり効いた、一撃で膝が笑ってやがる。一発で形勢逆転かよ。

「なかなか面白い戦い方だったぜ、満足した。そろそろ楽にしてやる」

決めに来る気だ、フラつきながらも立ち上がる。頭をフル回転させろ、まだ何かあるハズだ!!

「まだ戦う気かよ、面白え。せいぜい頑張りな坊主!!」

連打を仕掛けてきた、拳で上半身のみ打ってきやがる。確実に蹴りをブチ込む気だ。頭部は何とか防げているが、腹部はどうしても防ぎきれない。

ゴッ　ドズッ　パァン

これはゴングの鳴る試合じゃない、止めるような人間も居ない喧嘩だ!!守ってばかりでは勝てないどころか最悪死ぬ!!此方から攻めて攻撃を止める必要がある。回避や防御を優先する急所への攻撃で止める!!

(まずは金的狙いの…)

左背足蹴り上げ、両足を閉じて止められる

(次は両目を狙った…)

フィンガージャブ、スウェーで避けられる

(顎を狙った…)

飛び膝蹴り、サイドステップで避けられる

（一発も当たらない!?）

「そろそろ終わらせるぜ!!」

後ろに回り込んだ釈迦堂は

着地した大和の背後から

襟を掴んで引き倒そうとした

引き倒されまいと踏ん張る大和

が突如襟を離され前のめりになる

大和が両手を床に着いた直後

釈迦堂の裏三角絞めが極まった

大和は作戦"ガンガンいこうぜ"を選んだ！

怪しげなオッサンの"大蠍撃ち"!

大和に大ダメージ！

怪しげなオッサンの"裏三角絞め"!

大和は動けない！

死の谷へご案内します

風間翔一
川神学園２年Ｆ組所属
風間ファミリーのリーダー、大和とは幼馴染みになる。両親達が仲が良く、大和からすれば一番古い友人になる。でもファミリーには入らない。この小説では大和が百代の舎弟ではないので、翔一自身のカリスマと器の大きさを気に入ってファミリーに加入している。スキンシップもされているが、今のところ意識はしていない様子。バイト三昧でやっぱり時折旅に出る。

２００９年４月２６日（日）　深夜
歓楽街　廃ビル

ミシッ　ギシッ

「ぐぅぅ…」

（完全に極められた、自由に動かせるのは両足と左腕だけ）

一度深く極まった絞め技を外すのは、フィジカルに相当差がないと難しい。背面を取られているなら更に難易度が上がる。

左腕で外すのは不可能、右腕を掴まれているから回転も出来ない。俺が外すのではなく、相手に外させるしか方法は無い!!

メキッ　メキッ

（お…落ち……る…）

「これで終わりだ」

なかなか苦戦したが、何とか絞め技を極める事ができた。鼻骨折れたかな？かなり痛えし。

（指でも折りたかったが、親指を包むように拳を握ってやがる。まだ諦めてねえのか？）

その根性には敬服するが、根性では絞め技は外せない。落ちるのも時間の問題だ。

トン

（…？）

タップのつもりか？

トン

生憎落ちるまで外すつもりは無い、タップしても無駄だぜ。

トン

（…あった……ろ……つ…）

もう限界が近い、今の俺にできる抵抗は痛みを与える事くらいだ。左腕が届く範囲で絞め技を外す程の痛みを与えられる部位、筋肉の薄

い肋骨の間しかない。これは賭けだ、痛みを与えたからといって外すとは限らない。だが、緩みさえすれば脱出できる可能性が上がる。

タップするフリで肋骨を探し

左手を置いた大和は

右手の拳を解き

シャツを掴んで上半身を制し

肋骨の間を狙って

親指を全力で捩じ込んだ

「ぐがあぁ!?」

拘束の緩んだ後の大和の行動は速かった

釈迦堂が右腕を掴んでいた両手を離すと

右腕を引き足と首の間に入れ隙間を作り

回転し床に片膝を着け

左腕と右足で下半身を押し

強引に頭を引き抜いた

「ッハァ、ハァーッ、ハァーッ」

（き…距離……を…）

フラつきながらも下がろうとするが

釈迦堂も素早く起き上がり

追撃を掛けようとしていた

（トンデモねえやり方で脱出しやがって!!）

脇腹には激痛が残っている、シャツに血が染みていて皮が少し裂けたのが分かる。傷は浅いから徐々に痛みも引いていくだろうが、待っている暇は無い!!

（コイツは本当に強い、呼吸を整えられる前に勝負を決める!!）

さっきの攻防で確信した、意識がある限りコイツは負けを認めない、諦めるなんてあり得ない!!時間を稼がれ、態勢を整えられても此方が不利になるだけ。一気に攻めて倒しきる!!

（リングで吹き飛ばせば爆発で見失う可能性がある、ここは打撃で倒す!!）

奴は足下が覚束無い程疲れている、今なら大技で決められる!!

その技は

川神流の数多くの技でも

使える者が限られる大技

あまりに強力で危険な為

禁じ手として伝わっている

それの名は

「川神流禁じ手、富士砕き!!」

(頭が回らない……ただ…決めに来るのは……分かってる…)

時間を掛けて失敗したんだ、打撃で一気に決めるつもりだろう。ただ、今の状態で防ぐ自信は無い。

(…せめて……あと…15…いや…10秒)

何とか時間を稼ぎたいが、会話する余裕も無いくらい呼吸が乱れている。

(アレしか無い…)

「川神流禁じ手、富士砕き!!」

相手は一度両目を潰されている

そこを利用する

今度も上手く潰せるとは思っていない

ただ攻撃を中断させるのが目的

袖からフラッシュライトを取り出し

釈迦堂へ向け点灯する

「チッ!?」

（一度使った手だ、目を眩ませるのは無理だろうが、一度喰らったからこそ攻撃を中断し避けようとするだろう）

狙い通り、フラッシュライトを向けた瞬間攻撃から回避に移行した。ライトを点けたまま、距離を離していく。

「同じ手を喰らう程間抜けじゃねえ!!」

左に回避した釈迦堂が

身を屈めながら突っ込む

（フラッシュライトはここまでだな）

ライトを消し、窓から外へ投げ捨てる。ライトを点けたままだと此方の視界も悪くなるし、相手に取られて利用される恐れもある。

（タックルからグラウンドに持ち込む気か？）

打撃にしては体勢が低すぎる、マウントを取るつもりか？

（膝蹴りでカウンターを狙うか？いや、ここは付き合わずに距離を置

く）

階段へ向け走り出す、オッサンも追いかけて来たが構わず階段を駆け上がる。広い空間を離れ狭く段差があり、打撃を当て辛い階段で戦う!!

（オッサンも気付いて警戒している。階段を駆け上がらず、歩いて登って来ている事が何よりの証拠だ）

此方が態勢を立て直す前に勝負を決めたかった筈、だが今は時間を掛けてでも警戒を怠らない選択をした。確実にこの階段で仕掛けて来ると確信している。

（普通なら戦う事がない場所での攻防は俺に分があるか、最悪五分五分と判断しているが…）

相手は川神流の技を使い、これまでの攻防からも相当の使い手だと確信している。俺の知らない技や技術で仕掛けて来る可能性もゼロではない。

（…考え方を変えよう、格上相手に五分五分まで持ち込めたと）

元々予定外の相手との喧嘩だ、とっくに俺の計画は狂っている。だが、自分が強くなったか確認するのにこれ程都合の良い相手はいない。

（あらゆる手を使って勝つ、勝って俺が強くなった事を証明してやる!!）

（結局決められなかったな。それどころか時間を稼がれ、ヤりづらい場所に誘われる。失態ばかりだな、今日は）

何処の誰とも分からないガキに粘られ、手古摺っている。しかも向こうは勝つ気満々ときた。

（こんな奴が隠れていたのか…）

ガラスが散乱している階段での攻防、勝率を少しでも上げる為に誘っているとバレバレだが…

（そんな小細工で俺に勝てるかよ!!）

釈迦堂はゆっくり階段を登る

大和が居るであろう上のフロアへ

（向こうから売ってきた喧嘩だ。好戦的な性格をしている以上、自分から売った喧嘩で退く訳がない）

さっきまで戦っていたフロアから2階も登っていない、そろそろ姿が見える頃だろう。ガラスを踏み潰す音も聞こえてきた。

（これ以上長々と戦っても俺の勝率が下がるだけだ、短時間で終わらせる）

ガラスを粉々に踏み潰し、両手に握り込む。後はアイツをブッ潰すだけだ。

「こそこそ逃げ回るんじゃねえよ」

最後の攻防が始まる

（路地裏でしてやられたな、アレを思い出すぜ）

狭い空間を活かした攻防だった、この階段も似たような狙いで選んだ筈。余程特殊な場所で戦う事に自信があるということだろう。

（この狭さと段差なら、頭から投げ落とすのが上策だな）

読まれている可能性もあるが、此方が低いから蹴りに注意すれば掴むのは容易いだろう。掴みさえすれば背負い投げで決める。

（必ず掴みに来る、投げ落とすか壁に叩きつけるかのどちらかだ）

向こうの方が低い位置に居る、掴んでしまえば投げ落とすのは簡単だと思っているだろう。頭を掴んで壁に叩きつける可能性もあるが、自分より身長が高い奴の頭を低い位置から掴むのは難しい。また、威力も考えると投げ落とす確率の方が遥かに高い。

（胸ぐらと袖を掴みに来る!!）

釈迦堂が階段を駆け上がる

右腕を胸に伸ばし

左腕は大和の右袖を掴みにいく
（防がずにあえて掴ませる）
大和は胸ぐらと右袖を掴ませると
釈迦堂の顔を左手で掴む
手の内に握り込んだガラスが
両目に入るように
「ッ!?」
釈迦堂は慌てて両目を瞑る
大和はその隙に釈迦堂の左側から
同じ段へ降りる
顔を掴んだままの左腕で
後頭部を壁に叩きつける
ゴガッ
左腕を顔から離し
胸ぐらを掴んでいる右腕を掴む
両腕を使えない為がら空きの股間に

左膝で金的

ドズッ

「グッ!?」

右腕を掴んでいる左腕を振り払い

逆に掴み返し脇に頭を差し込む

右腕を掴んでいた左腕を

釈迦堂の股に通し担ぎ上げる

(何度も俺の打撃を防ぎやがって!!)

その技は消防やライフセービングでは人間を担ぎ上げる技術だが、プロレスでは様々な派生技が存在する技として使われている。いわゆる…

ファイヤーマンズキャリー

(段差がある分、より高い場所から落とす事ができる。この技が耐えられるかよ!?)

大和はファイヤーマンズキャリーではなく

派生技をフィニッシュに決めていた

その技は

別名、死の谷落としと呼ばれる

「これで終わりだ」

釈迦堂を担ぎ上げたまま

頭から落ちるように

自分も横に倒れこみながら階段を跳んだ

その派生技の名は

デスバレーボム

ドゴォン

大和は怪しげなオッサンを倒した！

チャラチャラシテンジャネー♪

大和はレベルが上がった！

大和は"死の谷落とし(デスバレーボム)"を覚えた！

大和のちからが3上がった！

大和のかしこさが2上がった！

大和のすばやさが5上がった！

大和は怪しげなオッサンを川神院に通報した！

俺もベホ●使いたい!!

川神鉄心
川神学園の学園長にして川神院のトップ、スーパーおじいちゃん。川神百代の祖父でもある。百代とまともに戦える数少ない人物の一人。かなり高齢の筈だが、実力は世界中から挑戦者が来る程の超人。最近は全盛期程の体力は無い為、孫の百代に戦闘欲求の発散を兼ねて挑戦者の相手をさせている。

２００９年４月２６日（日）　深夜
歓楽街　廃ビル

釈迦堂を倒した大和は、宇佐美巨人に川神院の技を使う奴に襲われた事を伝え、川神鉄心及びルー師範代に『身柄の確保と処遇について相談したいので此方まで来てもらいたい』と伝言を頼んでいた。無論、呉々も川神百代に気付かれないように気を付けろと念押しして。

「そう、場所はゲンさんも知ってるから。しっかり伝えてくれ」

「分かった、充分に気を付けて待っとけよ」

ブチッ

大和は返事もせずに電話を切り、フラつきながら窓へ近寄ると身を乗り出した。

「オエェェッ!!」

ビシャッ

激闘が終わり気が弛んだのか、外へ遠慮なく嘔吐する。

肋骨は折れてないようだが、腹を殴られまくったせいで内臓が悲鳴を上げている。特に大蠍撃ちとかいう技は効いた、後ろに跳んであの威力ならまともに喰らっていたらと思うとゾッとする。

(勝つには勝ったが、運が味方したところが大きい勝利だ)

今回の喧嘩は予定外だったが、色々課題が見えた収穫の多い戦いだった。まず、何よりも必要なのは強い練習相手、組み手で実際に技を練習し戦い方の幅を広げたい。自分以外の人間の考え方や知識も学ぶ事で喧嘩に活かせる筈だ。毎回毎回実戦で経験を積む事がどれだけ無謀な事だったのか改めて思い知った。そしてもう一つ必要なのが…

(ダメージを回復させる為の休息)

対戦候補の板垣姉妹の相手をしている余裕は無くなった、あのオッサンが板垣姉弟とどういう関係かは知らないが、川神院の技をそいつらに教えている可能性がある。門外不出の武術だ、ルー師範代や川神鉄心が吐かせようとするだろう。仮に吐かないとしても、板垣竜兵の名前を使えば姉妹を更正させるとして、川神院に縛り付ける事はできそうだ。

(俺もべ●マが使えれば…!?)

『オエェェ』

２００９年４月２６日（日）　深夜

川神院

「分かった、すぐにその廃ビルへ向かうとするかの」

大和が釈迦堂を倒し、これからの方針を考えている頃。川神鉄心はルー師範代から『歓楽街にて川神院の技を使う輩に直江大和が襲われた』と宇佐美巨人から連絡があった事を聞いていた。

「…やはリ、釈迦堂の仕業なんでしょうカ？」

二人の脳裏に思い浮かぶのは、以前に破門とした男。自身の戦闘欲求を満たす事を優先する、獣が人の皮を被ったような弟子の事。

「確かめてみないと何とも言えんの」

本当に釈迦堂だとすれば、直江大和に負けたという事になる。でなければ川神院に連絡が来る理由が無い。破門された理由が好戦的な性格にあったのだから、川神院の技を素人の高校生相手に使ったと知られたらどうなるか、分からない程頭が悪い訳でも無い。最悪粛清の対象になる事を覚悟して使ったのか？それ程直江大和は強かったのか？

「では、モモに気付かれないよう気配を消して行くとするかの」

二人は廃ビルへと向かう、自分達の疑問を解く為に。

２００９年４月２６日（日）　深夜

歓楽街　廃ビル

「随分ボコボコにヤられたようだが大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。骨は折れていないし、数日安静にしていれば痛みも治まるだろ」

「自己診断じゃなくて病院に行け」

川神鉄心とルー師範代が川神院から出発して5分後、宇佐美巨人と源忠勝は大和が待機している廃ビルで釈迦堂と大和の応急処置をしていた。大和が廃ビルでタクシーを降りた後、忠勝は大和が負けたときに備えて一旦巨人と合流し近場で待機していた為、数分後には大和の居る廃ビルに到着していた。

「まあそんな事より、設定を確認しよう。俺は代行のバイト帰りにオッサンに襲われた」

「あらかじめ非常時に備えて、俺か親父にワン切りすると逃走車としてタクシーが来る手筈になっていた」

「逃げ切れそうになかった為、二手に別れて腕に覚えのある大和が廃ビルで時間稼ぎ。忠勝が俺を呼びにタクシーで迎えに来る予定だったが」

「俺が強すぎて二人が到着する前に撃破。川神院の技を使用していたので川神院に連絡した。完璧な理由だな!!」

「まあ、追及されそうな事もしらを切れば確認できねえだろうしな」

「板垣竜兵を煽るときに使った奴らも、あれから何も喋ってないのを確認したし」

事前確認で矛盾がないか確認する三人の姿は、手際が良すぎて騙し慣れている詐欺師のようだった。

それから更に１０分程経った頃、川神鉄心とルー師範代が廃ビルに到着した。二人は大和と釈迦堂の外傷を診断して、命に別状が無い事を確認すると大和に事情を尋ねた。

「…ふむ、確かにこの者は以前川神院で師範代をしていた釈迦堂刑部という者じゃ。精神的に問題があった為破門にしたのじゃが…」

「詳しく話を聞きたいんだけド、大和クンは身体の方は大丈夫かナ？どこか酷く痛むような箇所とかハ…」

「腹部をボコボコに殴られたんで吐き気が凄いですが、骨折はしてないかと。頭は打ってないですし、絞めが極まりかけただけですので」

「そうか…では、少しだけ話を聞かせてもらうぞい」

大和は、先日板垣竜兵に絡まれ撃退した事。釈迦堂に板垣竜兵を倒したのが自分か尋ねられ否定した事。その場を立ち去ろうとしたときに釈迦堂が自分を捕まえようとしている事に気付き、逃走しようとした事。念の為、二手に別れて逃げ切れたか確認して逃げ切れていなかった事。自分が時間を稼ぎ、忠勝が宇佐美を連れて来る予定だったが倒してしまった事を話した。

「板垣と釈迦堂の関係は知りませんが、それなりに交流があったのかもしれません。調べてもらえますか？」

「分かった、この件は川神院が責任を持って調べよう。釈迦堂の方も此方で身柄を預かるが、それで良いか？」

「はい、それと万が一板垣姉弟が釈迦堂から川神院の武術を教わっていた場合は…」

「川神院が責任を持って更正させるヨ。安心して良いからネ」

「ありがとうございます」

「じゃあそろそろ帰りますか。直江と忠勝はオジサンが寮まで送ってやるよ」

「よろしく頼んだぞい」

この一件は、川神院に責任を押し付ける形で収束した。喧嘩を売らせるように周到に準備し、予定外の事態が起こっても対処出来るように罠を張っておいた喧嘩。唯一その可能性を睨んでいた釈迦堂も確証を得られなかった以上、板垣をスパイに煽らせた事が露見する事はないだろう。川神鉄心とルー師範代がそれに気付く可能性は摘み取られた。

２００９年４月２７日（月）
島津寮　居間

早朝、朝食を摂る為に皆が一階に集まるが大和の姿は無い。

「あれ？今日は大和の奴遅いな」

「珍しいね、いつもならとっくに起きてる時間なんだけど…」

不思議に思う者

「寝坊か？誰か起こしに行った方が良いんじゃないか？」

「!?あの、でしたら私が…」

起こした方が良いのではと思う者

大和がバイトで深夜まで働く事があると知っている者もいるが、学校を休むという事は無かった為気になったようだ。

「直江の奴は昨日のバイトで負傷した。今日は休んで病院に行くと言ってたぞ」

そんな中、唯一事情を知っている忠勝が風間達に説明し始める。当然、知られても構わない部分だけを選択して口にする。

「何ぃ、大和がヤられただとぉ!?」

「本当に珍しいね、そこらの不良相手なら無傷で倒せるでしょ？」

「俺も詳しくは知らんが、相当強い奴に絡まれたみたいだな。勝ちはしたが、腹を殴られまくって吐き気が治まらんと言っていた」

(流石に本当の事を話す訳にはいかねえからな)

「そっかー。よしクッキー、お前は今日は大和の世話をしておけよ」

「了解だよ、マイスター。任せといてよ」

その後、大和はクッキーに引き摺られ病院に連れて行かれた。

２００９年４月２７日（月）　昼休み

川神学園　賭場

川神学園には時折賭場が開かれる事がある。非公認なイベントだが、教師も積極的には取り締まらないので、教育の一環として黙認されているようである。そんな賭場、もとい社会勉強の場で、一人の青少年の悲鳴が響き渡った。

「ギャアアァァァ!?チックショオォォ!!」

青少年の名前は福本育郎、渾名はヨンパチ。カメラを手に女体を撮るエロの権化。どうやら麻雀で大負けした様子。

「身の程知らずに此方に挑むからじゃ、少しは腕を磨いてから出直すのじゃぞ」

(フフン♪最近F組の連中はバカの癖に調子に乗っておるからのう。いい気味じゃ)

こっちの少女は不死川心。ボッチ、家柄至上主義のヘタレ美少女。此方は逆に大勝した様子。

「くっそ、可愛いからっていい気になりやがって。こうなったら大和に仇を取ってもらうぜ」

※注意・大和は今日は欠席です。
興奮して忘れている様子

「劣等らしい捨て台詞じゃのう。バカクラスから誰を連れて来ようが、此方に勝てる訳無いであろう」

賭場の空気は最悪と言えるだろう。不死川の言動は福本以外の生徒であっても、気持ちの良いものではない。福本の方も時折台詞に下

ネタが混ざる為、軽蔑の眼差しを向けられている。

「言ったなぁ、後になって逃げるんじゃねえぞ!!」

「貴様こそ、後になって泣いても知らんぞ!!」

こうして大和が休んでいる間に、F組対S組の構図が出来上がっていた。

大和は腹部にダメージが溜まっている！
大和は嘘（ブラフ）を使った！
川神院に責任を押し付ける事に成功した！
大和対不死川の決闘が勝手に決まった！

バレなきゃ良いんだよ

不死川心
川神学園２年Ｓ組所属
不死川家のご令嬢。川神学園のヘタレクイーンにしてドＳホイホイ。可愛い、泣かせたい。小柄で華奢な体格だが、柔道の腕前は全国区で関節技も使える等、意外とインファイターである。得意技は華麗なる内股と高貴なる跳び関節。…ぐうかわ。

２００９年４月２７日（月）　昼
島津寮１０２

「ヨンパチがＳ組の生徒と揉めた？」

病院でレントゲンとエコー検査を終え、寮で遅めの昼食を取っていると忠勝から電話が掛かってきた。どうやらＳ組の生徒相手に賭場で大敗した奴がいて相当揉めたようだ。

『ああ、明日辺りお前に仕返しを頼みに来るんじゃねえか？』

（正直面倒だ、早いとこ組手の相手を見つけたいところなのに…）

「分かった、悪いんだけど一応相手の情報を集めてくれない？報酬は寮に帰ったら払うから」

面倒だが断っても角が立つだろうし、組手の方も候補すら上げられていない。それならまだ貸しを作っておいた方がマシだ。

『分かった、それで怪我の方はどうだった？病院に行ったんだろ』

「痛みも引いてるし、骨は折れてないってさ。痣は暫く残るだろうけど」

『そうか、あまり無茶はするなよ』

「分かってるよ～。それより情報収集の方ヨロシクね」

『了解だ』

プチッ

さて、俺は組手の候補でもリストアップするとしますかね。

２００９年４月２７日（月）　夜

島津寮

夕食時、この時間帯は基本的に寮生の全員が集まる。バイト等で揃わない時もあるが、基本は時間を合わせて食事をする。

「そういえば大和、暴漢に絡まれて怪我したんだって？」

そう尋ねたのは、大和と一番付き合いの長い風間翔一。風間ファミリーと呼ばれるグループのリーダーで、大和や忠勝をファミリーに誘った事がある。

「怪我って程じゃねえよ、骨は折れてねえし痛みも引いてきてる」

「ふーん、まあ大事にならなくて良かったね」

相槌を打ったのが椎名京。風間ファミリーの一人で、大和や風間とは同じ小学校だったが大和とは同じ寮に入るまで話した事は無かった。母親が他所の父親に手を出してイジメの対象にされていたが、元々椎名は武術を教わっていたので直接暴力を振るわれる事は無く、ネチネチした嫌がらせも当時の大和が気に入らない奴を片っ端からボコっていたので、徐々に沈静化していった。

「ふむ、バイトとはいえあまり治安の悪い場所には出向かない事だな」

大和に忠告したのがクリスティアーネ・フリードリヒ。先日ドイツから留学生として川神学園に編入してきた。風間が気に入り、ファミリーに入れようとしたが様子見に落ち着いた。皆にはクリスと呼ばれる事が多い。

「大和さんはかなり喧嘩慣れされてると聞きましたけど、そんなに強い相手だったんですか？」

質問してきたのが黛由紀江。ここの寮生唯一の一年生で、此方も風間ファミリーに入ったとの事。父親は『剣聖』と呼ばれる程の人物で、いつも帯刀している刀も父親が国に掛け合って許可を得ているそうだ。また、松風という黒馬の携帯ストラップを身に付けており、腹話術を使って会話する。……九十九神？無えよンなモン。

『ば、ちょ、まゆっちそれ訊いたらイケナイ話題だろ。ボーイのプライド考えてやれよー』

（…中々毒吐くな、この一年）

「そうだね、今度組手に付き合ってくれないかな？まゆっち」

気を取り直して黛後輩を組手に誘う。組手の候補として真っ先に上がったのがこの娘だ。帯刀を許可される程の腕前と、何より人格に問題が無いのが大きい。組手に付き合ってくれる可能性が一番高く、実力も申し分無い。九鬼家のメイドも考えたが仕事を優先されるだろうし、余程メリットがないと取り合ってもらえないだろう。

「ええ!?わ、私がですか？」

「そう、護身用の練習って感じでさ」

会ってからまだ日が浅いが、人の良い性格なのは見てとれた。あくまで護身の為の鍛練なら付き合ってくれると判断した。剣術が主なんだろうが素手の体術も使えると見て間違いないだろう。

「私で良ければいくらでも付き合います!!」

「…？何で自分には頼まないんだ？」

クリスが不思議そうに訊いてくる。

「手加減が下手そうだから」

「ナニー!?」

憤慨するクリス。それを意に介さず大和は話題を変える。

「それより、今日S組の生徒と揉めたって聞いたんだけど。どーなん？」

話題を昼に聞いた賭場の一件へ移す。少しでも役に立つ情報を手に入れる為に。

「ああ、そういえばヨンパチが何か騒いでたな」
「賭場でS組の生徒にボロ負けしたと聞いた。明日辺り仕返しを頼まれるかもね」
「賭場…ですか？川神学園にはそんなモノもあるんですね」
「うん。たまに開かれるんだけど、イカサマとかもバレなきゃ黙認されるから。自信が無いなら行かない方が良いよ」
「賭け事もそうだが、イカサマ等以(もっ)ての外だ。自分は気に入らないな」
「まあ、負けた連中は自業自得だし。それも社会勉強って事で先生達も積極的には取り締まらないからね」
中々思うように話題が進まない為、大和はそれまで黙々と食事をしていた忠勝に視線を向け、話題を強引に進める事にした。
「ゲンさんは相手の生徒について何か知ってる？」
忠勝は大和が相手の情報を得たがっているのを知っている。大和の意を察した忠勝が返答する。
「不死川って女子生徒だと聞いたぜ。いつも着物を着ているから目立つ奴だ」
「不死川ねえ、誰か聞いた事ある？」
「ン～？……俺は知らねえな。京は何か知ってるか？」

「確か…良いトコのお嬢様だって聞いた事あるかも」
「いつも着物着てるなら、それなりに学園に寄付してるだろうしな。S組に入ってるのに、内申点捨てたりはしないだろ」
「キャップは内申点捨ててバンダナを巻いてるけどな」
「アレお気に入りなんだよ。冒険家になるなら内申点必要無いしな」
(…ア～、また逸れてきた。これ以上は無理に聞き出せないな)
川神百代と親しい奴にはあまり動いている事を知られたくない。向こうはもう俺に興味は無いだろうが、何が原因で目を付けられるか分からない。ここ最近はかなり動いているし、今まで以上に慎重に動こう。
その後は和やかな雰囲気で夕食を終えた。

夕食後　島津寮１０２

忠勝が今日集められた情報を大和に報告に来ていた。
「不死川家のご令嬢ってのはさっきも話に出た通りだ。後は柔道を嗜んでいるらしく、腕前は全国区らしいな。…悪いが今日はこれくらいしか集まらなかった。すまねえ」
バツが悪そうに忠勝が謝る。短い時間とはいえ思ったより集まらなかった為、気にしているようだ。

「いや、柔道をやっていると分かったのは大きいよ。決闘で戦うのもアリかな」

昨日負傷したとはいえ骨は折れていなかったし、学園の決闘なら勝負が決まったと判断されれば川神鉄心が止めに入る。ルール次第では無傷で勝つのも難しくないだろう。

「……まあイケるだろ。不死川には決闘で勝って組手の相手になってもらおう」

「仮にも全国区の柔道家だぞ。勝算はあるのか？」

「当然あるさ。楽しみに待っていろよ♪」

２００９年４月２８日（火）　早朝
川神学園　学長室

翌日、大和は板垣姉弟の件を直接確認する為に学長室に来ていた。

「昨日釈迦堂の意識が回復しての、まあやはりというか板垣姉妹に武術を教えておったらしい。明日の祝日にワシとルー師範代で身柄を確保するから安心せい」

「ありがとうございます」

「それにしてもお主、相当無茶苦茶な戦い方をしたらしいのう。釈迦堂の怪我もそうじゃが、お主の怪我も普通の喧嘩の範疇を超えておる」

「まあ、負けたら最悪死ぬと思って戦ってましたから」

（何か探っているのか？それとも世間話のつもりで言っているのか？）

判別できなかった大和は、話題を変える為強引に本題に入る事にした。

「それより学長に頼みたい…いや、相談したい事があるんですけど」

川神院の総代として負い目を感じている間に可能な限り利用させてもらう。釈迦堂が意識を取り戻した以上、間違いなくどう戦ったか吐かせるだろう。俺の戦い方を知れば、俺に不信感を抱く可能性は高い。ガラスや空き缶が俺に都合が良い形であったんだ、釈迦堂も薄々感付いていた筈。

（板垣竜兵は此方に喧嘩を売らされたという事に!!）

俺がタクシーで廃ビルに向かってから、釈迦堂が来るまでに用意するのは難しいと考える筈。前もって準備していた、もしくはさせていたと気付いていただろう。これがバレると俺の立場が被害者から加害者に移る可能性がある。確固たる証拠が無い以上、断定はされないだろうが不信感を持たれるだけで動き辛くなる。事が露見する前に利用する。

「今日決闘でＳ組の不死川って生徒と戦おうと思っているんですけど、向こうが決闘を受けたら戦闘による決闘を許可してもらえませんか？」

「…相手が受けたなら構わんが、お主怪我の具合はどうなんじゃ？」

「骨は折れてませんし、昨日一日休んだので大丈夫ですよ」
「……分かった。許可しよう」
「ありがとうございます!!」
大和は頭を下げ、自分の教室へ戻っていった。

「……ルーよ、お主はどう思った？」
２００９年４月２８日（火）
川神学園２－Ｆ教室
「大和ぉ、助けてくれぇぇ!?」
（予定通りに泣き付いて来たな）
どんな用件か見当がついているが、態度には出さずに対応する。
「どうしたんだ？ヨンパチ」

大和は情報収集をした！
大和は決闘の許可を得た！
大和はヨンパチに知らないフリをした！

俺の必殺技を見ろ!!

福本育郎
川神学園２年Ｆ組所属
愛すべき変態、通称ヨンパチ。ヨンパチの由来は４８手全て言えたから。いつもカメラを持ち歩いている。将来の夢は女体専門のカメラマン。開き直っているからか、時折格好良く見える。

２００９年４月２８日（火）　午前
川神学園３―Ｆ教室

（誰が釈迦堂さんを倒したんだ？）

川神百代の頭の中は、昨日からそれで埋め尽くされていた。戦う事に楽しみを感じる百代にとっては、新たな強者の出現は悦ぶべき事である。一昨日に負傷した釈迦堂を連れて鉄心とルーが帰って来たときに相手を訊いたが、既に口止めされていた。好戦的な百代と関わりたくないと考えているのは分かる。ある程度百代について詳しい人物が倒し、絡まれたくないから口止めしたと想像はつく。

（あの頑なな対応、私と戦わせないつもりだなジジイ…）

意識が戻った釈迦堂さんに訊いても答えてくれないだろう。そう思わせるくらい有無を言わせない態度だった。自分で探すしかない。が…

（相手を教えないって事は、私がマークしていない奴の筈）

例えば九鬼揚羽、揚羽さんならここまで隠しはしないだろう。揚羽さんでも倒すのは難しいと思うが、それならまだ納得できた。しか

し、現実的に考えてその可能性は低い。多忙の揚羽さんが深夜に治安の悪い場所を出歩くとは思えない。何より徹底して隠す理由が無い。

（まだまだ強い奴はいるって事か）

更に考えを巡らせようとしたとき、百代の脳裏にある少年が浮かんだ。

（いや、そんな筈はない。アイツが勝てる程、釈迦堂さんは甘くない）

浮かんだのは自分に負けて、無様に頭を下げた少年。勝てる筈が無いのに、何故頭から離れないのかと不思議に感じていると、一人の生徒が教室に帰って来た。

「昼休みに決闘があるんだってよ!!」

２００９年４月２８日（火）　午前

川神学園２－Ｂ教室前

前の休み時間に決闘を受けさせた大和は、他のクラスの生徒に不死川を煽るように頼んでいた。

「あのお高くとまっている女が泣くところを見たくないか？」

（Ｓ組の大半の生徒がプライドが高く、他のクラスを見下しているのは周知の事実）

態度や発言で散々反感を買っている奴を応援する人間は少ない。心情的には負けてしまえと思っている奴等を味方に、不死川の投げを煽らせる。

（このクラスだけでは足りない）

決闘を見に来た人間の３割程が一気に煽る事が出来れば、同調して煽る奴が必ず出てくる。初手に投げを選ぶ可能性はそれなりにあるが、煽らせる事で更に確率を上げる。

（時間は足りないが、出来るだけ多くの生徒を味方に付ける）

これも軽傷で決闘に勝つ為と自分に言い聞かせ、大和は次のクラスへ向かった。

２００９年４月２８日（火）　昼休み
川神学園　グラウンド

「それでは、これより決闘の儀を行う。内容は武器無しの戦闘。勝った者は負けた者に一つだけ命令出来る権利を賭けての決闘じゃ。勝利条件は相手の戦意喪失をワシが認めるか、戦闘続行が不可能と判断されれば勝利とする。勝敗が決するまでは止めんが、決着が着いた後に戦闘を続行しようとしたらワシが介入して止めに入る」

大半の生徒が昼食を終えた頃、川神鉄心が決闘の詳細について確認をしていた。グラウンドには既に大勢の生徒が集まっており、賭けを煽っている生徒も見受けられる。そして、相手に対する命令権を賭けた決闘だと分かると、一部の生徒からブーイングが出始めた。

『直江!!てめえ何を命令させるつもりだ!?』

『この鬼畜ヤローが!!』

『さっさと負けちまえ!!』

無論、学長の鉄心が許可している以上それなりに制約のある命令権だが、思春期の男子はそれでもブーイングを止めない。ブーイングは徐々に不死川の応援に変わっていく。

「ん～？」

そんな中、賭けを煽っていた風間翔一は違和感を感じていた。傍に居た百代が不思議に思い、翔一に尋ねる。

「どうした？キャップ」

「いや、ブーイング出まくってるのに大和に賭ける奴の方が多いんだよ」

（フフン♪良い気味じゃ。大人しく食券を賭けておれば良いのに、調子に乗って命令権なぞ賭けるからブーイングが出るのじゃ）

ブーイングが自分への応援に変わり、不死川は機嫌が良くなっていた。

（確かに体格は良いが、相手が大きい方が投げやすい。秒殺してくれるわ!!）

決闘はまだ始まっていないが、不死川は既に自分の勝利を確信していた。

（ブーイングから投げろコールへの移行、予定通りに事は進んでいる）

大和へのブーイングは、既に不死川への投げろコールに変わっていた。傍目には男子の嫉妬混じりのブーイングから始まったように見えている。

（格下が生意気に突っ掛かった形だ。プライドの高いＳ組の生徒も釣られて煽りだした）

不死川には決闘が終わった後も役に立ってもらう。その為には必要以上に負傷させる訳にはいかない。自分は無傷で、相手は軽傷で勝つのが俺にとっての勝利条件だ。

（川神百代も見に来ている。布石を打っておく絶好の機会だ）

「それでは…」

（先ずは敢えて掴ませる）

「始めぃ!!」

鉄心がそう言い終わると同時に、不死川が間合いを詰めて掴みに来た。大和はスタンスをいつもとは逆にしてボクシングのフォームに構える。右腕が前のサウスポースタイルから、迎撃しようと右ジャブを放つ。が、右腕は袖を取られ胸ぐらも掴まれてしまった。

（やっぱり此方の敵では無いのじゃ!!）

完全に大和を捕まえた不死川は、得意の内股で投げようとした。

だが

大和の足を跳ね上げる為の右足は

大和の右足に踏み潰された

（これでは投げられん!?）

自分より重く大きい相手を投げるには、全体を上手く使う必要がある。踏まれた足は向きを変える事も、動かす事も出来ない程しっかりと踏まれていた。フィジカルでは圧倒的に劣っている不死川はここで初めて焦りだす。投げに拘るように仕向けた大和はその隙を逃がさず、一気に勝負を決めに掛かる。

（俺の左手だけが空いている）

不死川の両手は大和を掴んでおり大和は右腕を掴まれている為、両者の中で大和の左腕だけが自由に使える一瞬の隙。

不死川の首を狙って

大和は左手で貫手を放った

所謂

地獄突きが突き刺さった

「かはっ!?」

本来貫手は指を鍛えないと打てない突きだが、比較的柔らかい首は突いても指を痛めにくい。地獄突きを喰らった不死川は仰け反り距

離を離そうとしたが、踏まれた足がそれを許さない。

（立て直す隙は与えない、このまま終わらせる）

大和は踏んでいる足を外さず、突きを放った左手を戻さずに首を掴み親指で喉を押し込んだ。

「ッ!?」

不死川は痛みと苦しさで大和の左腕を引き剥がそうと両手で掴んだ。右腕が自由になった大和は、右足が前のサウスポースタイルから左足が前のオーソドックスにスタンスを変え、右腕を大きく振りかぶった。

（今の俺では突きで失神させるのは難しい）

だから首を徹底して狙い酸欠気味にして、首を掴み両手を使わせた。これで心臓を守るモノは何も無い。

（見ているか武神？この技を忘れずに覚えておけよ!!）

その技は、決まれば一撃で相手を失神させる必殺技。一瞬でダメージを回復する奴が相手でも失神させる必殺技。屈辱的な敗北から立ち上がり、直江大和が川神百代に勝つ為に見つけた必殺技。

（この技を使って貴様に勝つ!!）

大和の"心臓打ち"が決まり

心臓を押された不死川は

糸が切れた人形のように崩れ落ちた

「それまで!!勝者、直江大和!!」

（何だ今の突きは？）

決闘の一部始終を見ていた百代は、大和が最後に放った突きの危険性に気付いていた。心臓を狙った打撃で一瞬の内に失神させる。自分の瞬間回復も意識が無い状態では使えず、試合なら失神した瞬間止められて敗北する。

（普通の人間には打てない。肉体を鍛え上げ、殺してしまう事を覚悟して初めて打てる）

技の有効性と危険性を正確に分析し、頭の中で対処方法を考え始める。戦闘に関しての才能では百代に勝る者はいないと言っても過言ではないだろう。戦闘に関しては…

川神百代は気付かない

まず間違いなく対武神の必殺技

何故それを見せたのか

隠していた方が都合が良い筈なのに

川神百代は確かに最強と言える強さだが、それ故に相手の裏をかいたりせずに、己の強さのみで勝つ事を好んだ。才能に恵まれているの

は、あくまで戦闘に関しての分野のみ。

後の戦いの為に事前に布石を打つ

そんな小細工に頼る必要が無い程強いから

川神百代は気付かない

２００９年４月２８日（火）　放課後

川神学園　保健室

「……ぅ？」

不死川心は決闘が終わった後、保健室で寝かされていたが放課後まで起きる事はなかった。何も出来ずに倒された事を考えれば、プライドの高い彼女からすれば幸いだったのかもしれない。明日は祝日でゴールデンウィークも控えている。当日よりは気持ちも楽になるだろう。

（ここは…保健室？……ッ!?）

そうじゃ、此方はあの山猿との決闘で負けたのか。何も出来ずに一方的に攻められて…

「～～～～～ッッ!?」

思い出すだけで腹が立つのじゃ、山猿の分際で此方に歯向かいおって。何とか仕返したいが人前にも出たくないのじゃ、あぁぁぁぁぁ～～～どうすれば良いのじゃ…

これから弄られるであろう未来を何とか回避出来ないか考えるが、

そもそも今は人に会いたくないので仕返しすら厳しい。厚顔無恥な人間なら悩まないだろうが、不死川には当て嵌まらない。何も思い付かず途方に暮れていると…

コンコン

ノックされる音が鳴り

「不死川さん、起きていますか？」

不死川が今一番会いたくない

直江大和の声が聞こえた

大和は不死川心を倒した！

テーレッテー♪テーレッテー♪

大和は"心臓打ち"を覚えた！

大和は不死川に命令権を行使した！

最近の若者は（ｒｙ

黛由紀江
川神学園１年Ｃ組所属
北陸は加賀の出身。父親は国から帯刀を許可されている『剣聖』黛大成。良い尻をしている。人付き合いが苦手で表情が強張ったり、すぐにテンパるなど重症のレベル。尻のラインは素晴らしい。当時武道四天王の一人だった橘天衣を倒す程の実力者で、既に父親を凌ぐ実力を秘めている。揉みし抱きたい尻の持ち主。松風と名付けた馬のストラップを身に付けており、腹話術で話す時は色々ハジケている。あの尻に顔を埋めてみたい。エヘヘ（、　３、）

２００９年４月２９日（水）　早朝
島津寮　庭

祝日の早朝、大和は先日頼んでいた組手を黛に付き合ってもらっていた。

（やっぱり強いですね。捌き方も上手ですし実戦を想定した戦いを得意としている筈）

黛はあくまでも剣術家、体術は万が一刀を使えない時の保険に修めているだけ。それでも、体術のみで勝ってきた大和の相手を出来るくらいには強く、何より性格が優しく怪我をしないように細心の注意を払ってくれる。組手の相手としてはこれ以上の逸材はいないと言える。

（打撃を中心に仕掛け、プロレス技や投げ技も使える。急所への攻撃も躊躇いが無く、体術だけなら２年生に勝てる人はいないのでは…？）

黛から見た大和の実力は、純粋な体術のみの勝負なら2年生でも敵無しという評価だった。3年には川神百代がいる為敵無しとは言えないが、少なくとも川神百代以外で勝てる人間は、教師のルー先生と学長の川神鉄心しか知らない。武器有りなら他にもいるだろうが、それでも充分強いと言えるレベルだ。

（これ程強い大和さんが怪我を負う相手が存在するなんて…）

昨日の決闘は、先日負傷したとは思えない素早い動きで秒殺している。長期戦では不利と理解しており、短時間で勝てるように仕掛けたから出来た事だが、黛はそれを知らないし知りようもない為、実力に差があったからと判断した。何よりも、その大和を負傷させる程の相手がいる事に戦慄した。

（自分もまだまだ精進せねば…）

若き天才剣士はより一層の精進を誓い、眼前の相手に意識を集中させた。

大和と黛の組手が一段落し、お互い呼吸を整えた頃を見計らって大和が切り出した。

「そういえばまゆっちさぁ、風間のグループ以外で友達出来たの？」

グサッと何かが刺さったように黛の動きが止まった。どうやら触れられたくない話題だったらしいが、大和は気にせず話を進める。

「まゆっちがこれからも組手に付き合ってくれるなら、仲良くしてほ

しい人がいるんだけど」

「……？」

黛としては、これからも組手に付き合う事に問題は無く、友人も欲しい為不都合は一つも無かったが、大和の言い方に違和感を感じた。

「昨日俺が決闘で倒した不死川さん。彼女にも組手を手伝ってもらう事になったからさ」

この台詞で黛は理解した。不死川という生徒は好意で手伝うのではなく、何か強制される理由がある事を。思い当たるのは、川神鉄心が言っていた命令権。自分に仲良くしてほしいのは、出来るだけ長く穏便に組手に付き合ってもらう為だと。何故なら…

「これからも組手の相手、お願い出来るかな？」

表情は笑っているが目は笑っておらず、有無を言わせない雰囲気を纏っていたから…

（『大和先輩超怖ぇーんだけど!?』）

２００９年４月２９日（水）　午前
川神院

（アイツ等大丈夫かな？）

大和に敗れ、川神院に身柄を拘束された釈迦堂は自身の弟子達を案じていた。先程、川神鉄心とルー師範代が板垣姉妹を更正させる為、親不孝通りに向かったからだ。

（まず間違いなく抵抗するだろ、勝てないだろうけど…）

自分の師である川神鉄心は勿論、同期のルー師範代にも勝つ事は出来まい。それが釈迦堂の出した結論だった。

（俺が加勢に行っても、怪我が癒えていないこの身体では足手まといになるだけだ）

あの坊主、直江大和と戦った時の傷がまだ癒えていない。仮に万全の状態で戦えたとしても、あの二人相手に勝てるとは思えない。何より…

（百代の奴が残っている、川神院を抜け出す事が出来ない）

好戦的な百代の事だ。俺が抜け出せば必ず力尽くで止めるか、尾行して来るだろう。結局分が悪くなるだけで戦局は好転しない。大人しく休養しているのが俺にとってはベストな選択か…

（師弟揃って川神院で更正か。……一人で更正させられるよりマシだな）

釈迦堂は早々に現実を受け入れた。

２００９年４月２９日（水）　午後

親不孝通り

「クソッ!?出鱈目に強いじゃないか」

「ウチのゴルフクラブが壊れたぁ!?」

板垣姉妹の亜巳と天使はルー師範代と戦っていたが、実力差が埋め

られず徐々に押され始めていた。

「もう諦めて大人しくしなさイ。釈迦堂も既に負けている。君達の報復は失敗したんだヨ」

釈迦堂が姿を見せなくなって既に3日目。認めたくなかった師匠の敗北という事実を悟るには充分な時間。ルーに言われずとも、板垣姉妹は薄々感じていた。

自分達は喧嘩に負けたのだと

「君達は川神院が引き取って更正させル。その力をこれ以上悪用されては困るからね」

だが、素直に負けを認める程潔ければ最初から抵抗しない。勝ち目がどれだけ薄くても、意識がある限り抗いどんな手を使ってでも勝ちに行く。

「そういう台詞は勝ってから言うんだね」

「ウチら相手に勝てると思うなぁ!!」

何故なら彼女達は

清々しい程に悪人だから

一方、川神鉄心は板垣姉妹の一人、板垣辰子と交戦していた。

「うぅぁあああああっ!!」

バス停を軽々と振り回し、鈍器として扱う異常な怪力を含めた非常に高い身体能力を武器に、辰子は鉄心に突撃していく。

(釈迦堂が武術を教えたくなった理由が分かるわい。逸材じゃ、力だけなら百代を凌いでおる)

鉄心は辰子の攻撃を避けながら、何故釈迦堂が掟を破ってまで武術を教えたのかを理解した。才能溢れる若者との出会いは、自分の信念を否定され打ち負かされ破門された釈迦堂には、宝のように見えただろう。

(直江大和といい、強い若者がどんどん出てきておる。これならば百代の奴も…)

近い将来負けるかもしれん

「あたたたたたたた!!!!!!」

ルーの猛攻を亜巳が棒術のリーチを活かしながら捌いている。距離を詰められそうになると、死角に入った天使が奇襲を仕掛け、ルーの前進を止めに来る。ゴルフクラブを破壊され丸腰にはなったが、ちまちました奇襲でルーの意識を散らしている。

(よし。やっと奴の攻撃に対応出来て余裕が生まれた。これで反撃が出来る)

天は元々防御にゴルフクラブを使っていた。素手であの男の攻撃を捌き切れるとは思えない。それなら私が受けに回って、天に攻撃を

邪魔させる方がマシ。受けは性に合わないが、勝つ為にはこの戦法しか無い。

（アミ姉も慣れてきた。そろそろ仕掛けられる）

あのオッサンをアミ姉が上手く牽制し、ウチが死角からの奇襲で意識を散らす。後はタイミングを合わせて挟撃を仕掛ける。

分かっていても対処が難しい挟撃。実力で劣る姉妹は連携でルーの意識を散らし、集中力が切れるのを辛抱して待つ。

（（集中力が切れた時が勝負!!））

辰子が攻撃を始めて数分後、回避に徹していた鉄心がついに仕掛ける。

「顕現の壱・摩利支天!!」

「!?」

鉄心の身体から熱が放出され、大気の温度を変化させる。温度変化により体積が変わった大気は密度も変わり、直進する筈だった光を屈折させた。

陽炎による視界の撹乱

辰子の目には鉄心が歪んで見え、正確な距離感を奪っていく。辰子が警戒して動きを止めたが、それを待っていたかのように今度は鉄心が攻勢に出た。

「ちょい」

一瞬で辰子の側面に回り込み、頸椎を狙った手刀を放つ。喰らえば問答無用で意識を刈り取るであろう一撃。陽炎により視界が不安定な辰子は一瞬反応が遅れる。だが…

「チィッ!?」

避ける事は叶わなかったが、頸椎を肩で守り直撃は逃れた。体勢が僅かに崩れたが、強引にバス停を振り切る。

「ヌン!!」

鉄心は後退せず、手刀でバス停を叩き斬った。辰子は意に介さず、斬られたバス停を突き立てる。

「顕現の参・毘沙門天!!」

切断され鋭利に変化したバス停。それが突き刺さる前に、鉄心の闘気で具現化した毘沙門天がバス停諸共辰子を叩き潰した。

「むぅ!?」

ルーの猛攻を長いリーチで潰しつつ、死角からの奇襲で前進を止める姉妹の戦法は上手くハマっていた。一人ずつ確実に仕留めるつもりだったルーだが、姉妹が上手く連携を取り出した為、攻撃があと一歩届かない状態が続く。

（防御を優先シ、長期戦を覚悟しての耐久作戦に変えたか。こちらの集中力が切れるのを待っているネ）

攻撃を喰らわない事を最優先にした作戦。ルーは直ぐに見破り、状況の打破を試みる。

（一人ずつ仕留めるのではなく、敢えて隙を作って誘い二人同時に仕留めル）

三人のダメージと疲労を考えても、先に体力が尽きるのは姉妹の方だとルーは思っている。だが姉妹の体力が尽きるまでこの状況が続くとは限らない。時間を掛ければそれだけ自分の体力も消耗する。体力を消費するという事は、余裕が無くなるという事。判断力が鈍り、攻撃を喰らう確率が上がるという事。

（悪いけど長期戦には付き合わないヨ）

天使の奇襲が決まり、亜巳と天使は勝負に出た。

渾身の奥義を当てた鉄心は息を吐く。怪力を誇る辰子の攻撃を喰らわないように、神経を磨り減らしながらの攻防。久方ぶりの緊迫した戦いに、流石の鉄心も張っていた気を緩めた。

勝負は決まったと勝手に判断し、残心を怠ってしまった。

「ぁあああ!!!!!」

毘沙門天を模した闘気に潰され、既に瀕死の状態を迎えている身体を無理矢理動かす。辰子の両手が鉄心の胴着を掴み、背後に回り込

む。両手を鉄心の腹部の辺りでロックし、一発逆転を狙った投げを仕掛ける!!

（まだ動けるのか!?）

勝負は終わったと思っていた鉄心の反応が遅れる。だが、辰子の投げは速く力強く抵抗を許さない。後方へ頭から叩き付ける、ジャーマン・スープレックスを決めた!!

ドオン!!!!

「ぐぅ!?」

ジャーマン・スープレックスには、いくつかの派生技が存在する。

投げる途中でロックした両手を離し、空中に投げ出す" 投げっ放し"

高さではなく、速度を求めてスライドするように投げる" 高速式"

より高い位置から投げ落とす事で威力を上げる" 高角度式"

受け身を取らせないよう、相手の両手を取って投げる" ダルマ式"

様々なレスラーが、技の完成を目指して改良してきた。そして、辰子が選んだのは一撃型ではなく連続型。ローリングジャーマン等と呼ばれる…

" ローリング式"

鉄心を頭から投げ落とした辰子は、その勢いを利用して回転する。

両手をロックしたまま…

（もう一度投げる気か!?）

確実に仕留めるべく、もう一度ジャーマン・スープレックスを仕掛けた!!

「せぁあああ!!!!!!」

大和は組手で経験値を獲得した！

ルーは作戦"避ける理由が無いから"を選んだ！

鉄心の顕現の参・毘沙門天が当たった！

辰子は怯まずローリングジャーマンを繰り出した！

名前を頂戴

板垣辰子

板垣姉弟の次女。竜兵とは双子で辰子が姉になる。板垣家の家事担当。普段は寝坊助を体現したような性格で、他の姉弟とは似ていない。戦闘能力は高く、特に力に長ける。レスリング系の技を使うが、姉の亜巳が許可を出すと本気になり、鈍器を使った強引な攻めに変わる。抜群の身体能力からの攻撃は非常に強力で、力だけなら百代の上をいく程。おっぱいが大きい。お尻も大きい。

ボン・キュボーン!!（。Д。）

２００９年４月２９日（水）

親不孝通り

ダメージが溜まった身体に鞭を打ち、辰子は鉄心を仕留める為二度目のジャーマン・スープレックスを仕掛ける。

「せぁあああ!!!!!!!!」

一度目のジャーマン・スープレックスの勢いを利用したローリングジャーマン。当然、一度目より二度目の方が勢いが強く、高い威力を誇る。

鉄心はその強い勢いを更に利用してより速く回転し、足から着地する事に成功した。

「なっ!?」

頭から落とされるのは回避したが、辰子の両手は鉄心をクラッチしたまま。早く脱出しなければもう一度投げられる。外すにしても、怪

力を誇る辰子のクラッチを力で外すのは不可能に近いと言える。流石の鉄心も、既に全盛期を過ぎて長い年月が経っている現在では外せない。

（ある程度のダメージを覚悟しての自爆技しかないかのう…）

この時点で鉄心は方針を切り替えた。出来るだけ無傷で勝つ為の防御重視の戦い方から、ダメージ覚悟の攻撃を仕掛けるようになる。

「川神流、人間爆弾!!」

鉄心を中心に爆発が起こり、衝撃が辰子の身体を吹き飛ばした。

鉄心と辰子の戦いが佳境に入った頃、ルーと板垣姉妹の戦いも大詰めを迎えていた。

（よっし!!遂にウチの奇襲が決まった。アミ姉との連携攻撃で終わらせる）

（相手は天の蹴りを喰らって体勢を崩している。挟撃の好機!!）

ルーの猛攻を捌き続け、ひたすら耐えて待ち続けた末の好機。姉妹には当然、千載一遇のチャンスに思えた。致命傷を与えようと攻撃に移る。

（思った通り、挟撃で仕掛けて来たネ）

一方、ルーは時間を掛ける程リスクが高くなると判断し、体力が充分残っている内に二人同時に倒そうと考えていた。敢えて奇襲を避

けず、自分の攻撃が先に当てられる程度に体勢を崩した。そして、ルーの狙い通り姉妹は挟撃を仕掛ける。

（……今ダ!!）

姉妹が二人共間合いに入った瞬間、突如竜巻が発生し二人を上空へ巻き上げた。

「バーストハリケーン!!」

板垣姉妹は竜巻に煽られ、体勢を整える事すら出来ずに地面に叩き付けられた。

「後は板垣辰子だけか」

ルーは二人が気絶しているのを確認し、離れた所で待機していた修行僧に後を任せ、自身は鉄心の加勢に向かった。

２００９年４月２９日（水）
島津寮１０２

「…技名を考えないとな」

黛との組手の後、自室で筋トレをやり終えた大和は、自身の技に名称が無い事を気にしていた。

（…やっぱり喧嘩●売の金剛と無極が良いな。あんまり長いと萎えるし）

元々、心臓打ちはこの漫画を読んで試した技だし、リミッター解除も無極の効果に入っているし覚えやすい。何よりネーミングセンス

が良く、俺のテンションが上がる!!

一撃で敵を昏倒させる" 金剛"

" 無極" による人体コントロール

この二つの技の完全な習得が打倒武神の鍵になる。拳撃による金剛はまだ不完全、無極もサイコロジカルリミットの解除しか出来ない。もう一つ習得したい技もあるし、早く完璧に使えるようにしないと。

金剛による失神は、力の強い蹴りではほぼ確実に決められるようになっていたが、蹴りに比べると威力が低い突きでは三回に一回程度しか決められていない。不死川との決闘で決まったのは、首への攻撃と咽喉を指で押し込み、呼吸困難な状態になっていたから決まった。

(金剛は数をこなしていくしかない。チンピラの心臓を殴りまくるか…)

無極による人体コントロールは、今のところ余力を引き出す使い方しか出来ていない。自分の脳を騙す事で様々な応用が出来る技なだけに、策を用いて戦う大和に向いている技と言える。

(無極は時間さえあれば練習出来る。暇を見て練習し早く習得する。そして…)

大和がもう一つ、どうしても習得したい技も川神百代との対戦で鍵になる。技を決める為に条件をクリアしなければならないが、決まれば自分の体力が許す限り打ち続ける事が出来る。謂わば…

相手の反撃を許さない連打

その技の名は

"煉獄"

２００９年４月２９日（水）

親不孝通り

ドオン!!!!!!

「!?」

板垣姉妹を倒し、鉄心の加勢に向かっていたルーは突然の爆発音に足を止めた。

（一体何が起こっていル!?）

川神院総代、川神鉄心を相手にまだ戦っているというのか？年老いて全盛期を過ぎたとは言うものの、未だ川神院のトップに君臨している男を相手に？いや、それよりもさっきの爆発は何だったんだ!?

ルーの頭に次々と疑問が湧くが、現在確かめる術は無い。混乱した頭は足を止めて思考する事を選択したが、疑問を払拭出来ない為冷静になる事も難しい。だからルーは再び走る!!確かめる為に!!

「ぐあぁぁ!?」

爆発の衝撃で辰子のクラッチが解け、身体が吹き飛ぶ。爆発は、衣服が焼けたり皮膚が焼け爛れる程の熱を放つ事は無かったが、爆発の

衝撃と至近距離からの爆発音で三平規管にダメージを与える事に成功した。辰子だけではなく、自爆した鉄心にも平等に…

（追撃を仕掛けたいが、足が動かん。距離を詰める必要が無い技…）

「顕現の弐、持国天!!」

気で具現化した巨大な腕が辰子を攻撃する。威力は低いが絶対に命中する技の特性を利用して、辰子の動きを封じ次に放つ技を当てやすくした。

（これ以上長引けばワシが不利になるだけ。この一撃で仕留める!!）

「かわかみ波!!」

鉄心の両手から極太のエネルギー砲が放たれ、辰子の身体を飲み込んだ。毘沙門天の一撃で限界を迎えていた辰子の身体は、遂に意識を手放し気絶した。

「ふぅ、少し疲れたわい…」

（数日は大人しく過ごすかの…）

直江大和と板垣竜兵の喧嘩から始まった一連の騒動は、釈迦堂刑部、板垣亜巳、板垣辰子、板垣天使の身柄の確保、更正。板垣竜兵の逃亡という結末を迎えた。

２００９年４月３０日（木）　昼休み

川神学園２－Ｓ教室前

（さて、昨日まゆっちにも話しておいたし早めに不死川と交流してもらおう）

大和は黛と不死川を引き合わせる為、S組に不死川を迎えに来ていた。

（決闘で勝って命令したとはいえ、出来る事なら好意的に協力してくれた方が良い）

まゆっちは川神に来て日が浅いし、友達を増やしたいって言ってた。所持している日本刀や奇抜な腹話術で近寄りがたいが、性格には問題無いし気品も感じられる。不死川の方も交友関係は狭いみたいだし、まゆっちを気に入る確率は高いだろう。二人共女性で同性ってのも大きい。

「チィ～ッス♪」

軽い挨拶（？）をし教室に入ると、多数の視線を向けられる。殆どは敵意を孕んだモノや訝しげな視線で、空気が緊迫していく。先日の決闘の結果が尾を引いているのが伺える。

「おや？大和君じゃないですか。S組に来るなんて珍しいですね」

そんな中、緊迫した空気をぶち壊す穏やかな声が掛けられる。細身のイケメンで、腰が低く育ちの良さそうな青少年だ。

「どうしたんだ若？って、直江かよ!?」

次いで話し掛けて来たのは、爽やかハゲとでも言うべき青少年。身長は高いが、身に纏う空気が穏やかだからか威圧感は感じられない。

「葵にハゲか。不死川に用があるんだが…その前にハゲ、テメェ俺がS組に来たら何か問題でもあるのかよ？あぁん!?」

大和とこの二人は、賭場でちょくちょく顔を合わせた事がある。若、葵と呼ばれたイケメンの名前は葵冬馬。ハゲの名前は井上準という。冬馬と準の親が同じ病院の院長と副院長で、長い付き合いの幼馴染みになる。

「相変わらず手厳しいな、オイ!?」

「大和君はドSですから。それより不死川さんですが…決闘に負けたばかりですし、休み時間が始まると直ぐに教室を出て行ってしまいますねぇ」

「まあ、教室には居づらいわな。プライドが高いし、登校して来るだけでも相当無理してるんじゃねぇか？」

（ん～やっぱり教室には居ないのか。俺も早く教室を出て来たんだが…）

散々見下してきたクラスの生徒に負けた事でプライドは傷付き、面子もある程度潰れただろうしなぁ。不登校にならないのは流石だが、これはあんまり良くない状況だな。まゆっちから接触してもらった方が良いのかもしれないけど、今のまゆっちのコミュニケーション能力には期待出来ないよな。

「あ～、分かった。ありがとよ」

「あ、ちょっと待って下さい」

大和は礼を言って教室から出ようとしたが、葵に呼び止められる。

「…？俺に何か用があったのか？」

「ええ、私もS組ですから。自分のクラスが負けっぱなしというのは嫌なので…」

「！」

「大和君、私とも決闘してもらえませんか？」

板垣亜巳、板垣辰子、板垣天使が川神院に引き取られた！
板垣竜兵が入院している病院から抜け出し、逃亡を開始した！
川神鉄心はダメージで数日動けない！
大和は葵冬馬に決闘を挑まれた！

両刀使い＆ロリコンｖｓドＳ＆ツンデレ

葵冬馬
川神学園２年Ｓ組所属
川神市最大の病院、葵紋病院の院長の一人息子。学年首席の成績優秀な紳士。外人とのハーフでルックスが良く、女子からの人気はかなり高い。九鬼財閥の長男、九鬼英雄とは親友。井上準と榊原小雪という幼馴染みがいて、よく一緒に行動している。人の心の機微に敏感で、心理戦が得意な頭脳派。

２００９年４月３０日（木）　昼休み
川神学園２―Ｓ教室

「私とも決闘してもらえませんか？」

今コイツの挑戦を受けるメリットは殆ど無いと言える。万が一俺が負ければ貴重な時間を無駄にした上、恥をかき面子が潰れる。断って不死川を探し、今後の為に機嫌を良くしておく利益以上に俺が優先するモノ。要は、何か賭けなければ俺が決闘を受ける事は無い。

「悪いが今度で良いか？さっきも言ったように不死川に用があるんだ」

「そうツレない事を言わず、付き合ってくれませんか？何なら何か賭けても良いですから」

（俺に都合の良い展開だが、コイツの手口は嫌という程見て来た。慎重に話しを進める）

「いくつか俺の条件を飲んでくれるなら付き合ってやっても良い」

（いくつかと言う事で数を曖昧にし、後から条件を出しやすくする）

「内容次第ですね。とりあえず言ってみて下さい。判断はそれからします」

「まずは賭けるモノの確認からだ。お前の顔が利くジムで、トレーニングやスパーリングがしたいんだが…」

「その程度なら問題ありません。好きな時に使用出来るよう約束します」

（よし、決闘を受けるだけの理由になるメリットを賭けさせる事が出来た。次は…）

「お前は俺に何を賭けてほしいんだ？」

「そうですねぇ……では、先日大和君が賭けていた命令権を一つ賭けて下さい」

「了解した。次に決闘方法だが、最終的には一対一の戦闘で勝敗を決めたい」

「私は荒事は苦手なのですが、最終的という意味を具体的に説明してもらえますか？」

「戦闘に関しては助っ人を呼んでも構わないし自分で戦っても良い。助っ人は特に何も賭ける必要は無い。そして、決闘の期日をゴールデンウィーク明けにする事」

「助っ人は誰でも構わないのですか？」

「川神学園の生徒で、川神百代以外なら誰でも構わないぞ」
「成程…確かに彼女では賭けてもらえませんからね」
「んで、最後の条件に…」
「まだあるのかよ!?」
「うるっせえ、ハゲ!!これで最後だ。戦闘方法は先日と同様、武器無しのバーリトゥードで戦いたい」
「分かりました。全ての条件を飲むので決闘を受けてもらえますか？」

そう言うと葵冬馬は、自分のワッペンを机に置いた。続いて大和も自分のワッペンをその上に重ねる。

「あ～あ、受理しちゃったよ。大丈夫なのか若？」
「ええ。では大和君、先生方には私から説明しておきますので不死川さんの所へ行って下さい。かなり引き止めてしまいましたしね」
「分かった。正式に日時が決まったらメールしてくれ」

大和が教室を出て行ったのを確認し、準が冬馬に質問する。

「若、直江は武道をやっていない素人だがかなり強い。生半可な助っ人じゃ先日の不死川同様、秒殺されるぞ」

「ですね。先日の不死川さんとの決闘は完勝と言える程圧倒的でした」

「なら何故戦闘での決闘を…」

「決闘まで時間があるからですよ。準は大和君が賭場で賭けをする時に、絶対に行う事が何か知っていますか？」

「……？」

「情報収集と事前準備です。レートが低い賭けの時は勝ちに固執せず情報収集に徹して、場合によっては敢えて負ける。もしくは仕込みを行う」

「確かに、レートの高い勝負でアイツが負けたところは見た事が無いが…」

「ギャンブルで勝ち続けると、勝負する事すら避けられるようになります。稼ぐ為にはコツコツ勝ちを積み上げるより、少ない大勝負で圧勝する方が効率的です」

「その少ないチャンスを確実に成功させる為の情報収集と事前準備？」

「そう。大和君は始め決闘に乗り気ではなかったでしょう？条件を付けてきたのは、決闘を受けるだけのメリットが無かったから。乗り気でないから条件で自分の希望に近づける事が出来た。駄目でも断ればいいだけ。そして、決闘を受けたからには必ず勝算がある」

「それと若が決闘を受けた理由に何か関係があるのか？」

「ありますよ。私と大和君は戦う前に勝つ事を理想としている。この決闘は私からすれば、限られた時間で情報を集めて策を考え助っ人を勝たせる事が勝利。要は『得意の策戦で俺に勝ってみろ』と挑発されたんですよ」

「よくそこまで相手の考えが分かるな。それで若はどう戦うつもりなんだ？」

「まずは情報収集ですね。それから決闘の期日ははっきりとは決めず、ある程度融通が効くように調整します。大和君はゴールデンウィーク明けとしか言っていませんし、此方の都合が良い日に決められる。バーリトゥードでルールは緩いですし、策は立てやすい」

「期日を左右出来るのは好都合だが、それはつまり直江はゴールデンウィーク明けなら、いつでも勝つ自信があるって事だろ？」

「そうですね。だからこそ面白い勝負になる。それはそうと準…」

『助っ人よろしくお願いしますね』

「……（。Д。）」

２００９年４月３０日（木）　昼休み
川神学園２－Ｆ教室

「ゲンさん、助けてくれぇ!!」

冬馬との決闘を受理した大和は、不死川を探すのを止めて自分の教室へ帰っていた。

「何だ、いきなり騒々しい。メシくらいゆっくり食わせろ」
「食べながらで良いから聞いてくれ。葵冬馬と決闘する事になったから手伝って下さい!!」
「……？待て、お前不死川の様子を見に行ったんじゃなかったか？それが何故決闘を受ける羽目になってんだ？」
「単刀直入に言えば、葵が賭けに乗ってくれたから受けてしまった」
「……ハァ。ゴールデンウィークの最終日にバイトがあるから手伝え。それで、何をすればいいんだ？」
「流石ゲンさん、話が早い。…定期的に葵を監視してくれない？」

２００９年４月３０日（木）　夜
島津寮１０２

大和と忠勝は、ゴールデンウィーク明けの決闘に向けてこれからの方針を決めていた。
「成程。決闘まで時間があるなら、助っ人と直接会って対策を考える可能性は高い…というより確実にそうするな」
「葵が直接戦う事は無いと言っていい。身体能力は低いし、戦闘での決闘は今までしていない。間違いなく助っ人を用意するだろう。早めに情報が欲しいし、変更する可能性もあるから出来るだけ長い間監視してくれ」
「分かった。こっちは俺に任せて、お前はしっかり技を仕上げとけ」

「おう!!ゴールデンウィークの間に"金剛"をマスターしてやるぜ!!」

「そういや不死川とは話したのか？結局昼休みは会えなかったんだろ？」

「ああ、だから明日もう一度探してみる。ゲンさんも見かけたら教えてくれ」

（不死川には重要な役割がある。絶対に蔑ろには出来ない）

川神百代にリベンジを誓ってから幾度も勝算を考えてきた。その度にどうしても障害になる技がある。

"瞬間回復"

ダメージだけではなく、疲労も回復させるこの技のせいで勝算が崩れる。この技を破らなければ俺に勝利はない。原理が分からないからどうしても仮説になるが、物理的に考えてアレが決まれば使えなくなる筈。

（いずれにせよ、不死川とは親密になっておくに越したことはない）

本格的に技の練習が出来る場所を葵に賭けさせる事は成功した。後は決闘に勝ち、体術を鍛え上げていく。最終的に体術が重要になる以上、この展開が今の俺にとっての理想だ。

２００９年５月１日（金）　昼休み

川神学園食堂

大和は昨日会えなかった不死川を、同じクラスの葵を使って呼び出していた。傍らには過剰に緊張している黛が座っている。

「まゆっち、緊張しすぎ～。同じ学園の先輩に会うだけだよ」

「は、はい!!」

（ガチガチに緊張してるなあ。今日は俺がいるからいいけど、二人っきりになった時はどうなるんだろ？）

まあ、不死川も後輩相手に変な言い掛かりはしないだろう。まゆっちは威圧感こそあるけれど品がある。家柄や格式を重視する不死川なら、絶対に気に入る。問題は…

『まあ、いざとなったらオラが何とかしてやるぜぇ～』

（このストラップで余計な事を言わないかどうかだよな…）

「待たせたのう山猿。して、此方に会わせたい人物とはそこの彼女か？」

「ああ、同じ寮に住んでいるまゆっちだ。まゆっちにも組手に付き合ってもらっているから、俺としては仲良くしてもらいたいのよ。それじゃ、まゆっち自己紹介して」

「は、はい!!1―Cの黛由紀江と申します。よろしくお願いいたします!!」

「う、うむ。此方は2―Sの不死川心じゃ。よろしく頼むぞ、黛」

緊張で強張った黛の表情に気圧されながらも返答する不死川。

「まゆっち、表情固くなってる」

『手厳しいー!?Σ（゜□゜；）』

「なんじゃこやつは？」

結論

松風には若干引いたようだが、概ね好感触と言える。これからの展開に期待する。

２００９年５月２日（土）　朝

島津寮居間

「おはよう、大和ちゃん。今日も朝早くから鍛練かい？」

「おはようございます、麗子さん。今日は少し出掛けようかと」

挨拶してきたのは島津麗子。島津寮の管理人で大和や翔一と同じクラスの島津岳人の母親だ。最近は韓流ドラマにハマっているらしい。

「お、ついに大和ちゃんにも彼女が出来たのかい？今度紹介しておくれよ」

「彼女なんていないですよ。むしろ紹介してもらいたいくらいです」

世間話をしながら朝食を食べていく。大和が麗子と知り合ったのは小学生の時だが、大和にとっては数少ない頭の上がらない人である。昔から世話になっているからというだけではなく、大和は麗子の人柄を好ましく思っているからだ。

「そうなのかい？この寮の男子は皆レベルが高いんだから、その気になれば恋人なんてすぐ出来るでしょうに…」

「あはは…だと良いんですけど」

「おい、直江大和。お前に客だ」

大和と麗子が雑談をしていると、外で鍛練していたクリスが大和に来客を告げて来た。大和によくからかわれているからか、クリスの態度は若干硬い。

「え⁉…こんな朝早くから誰だろ？クリスの知っている人？」

「いや、自分は知らないが川神学園の生徒だと言っていた。早く行ってやれ、客人を待たせるなよ」

「……？」

クリスに急かされた大和が玄関に向かい見た者は…

「おっはよーございまーす♪」

やたらご機嫌な真白い髪の美少女だった。

大和とイケメンの決闘が成立した！
ハゲが仲間になりたそうにイケメンを見ている！
イケメンはハゲを仲間にした！
色白の美少女が現れた！

デートの邪魔する奴は心臓殴られて死ぬ

榊原小雪
川神学園２年Ｓ組所属
白髪色白の美少女。葵冬馬、井上準の幼馴染みでよく一緒に行動している。性格は天然というより電波寄り。Ｓクラスに所属しているだけあって成績は良く、身体能力も高い。マシュマロが好きでよく食べており、忍足あずみに餌付けされている。何を考えているか分からないタイプ。
最強の美少女や居眠りお姉ちゃんがいる為目立たないが、スタイルが良く巨乳。
ヽ（＊´▽）ノ♪

２００９年５月２日（土）　朝
島津寮玄関

「えっと…君が俺に用がある人で間違いないかな？」

「そーだよー。榊原小雪でーす」

（榊原…？たしか葵やハゲとよくツルんでるＳ組の奴。向こうもこっちの行動を監視する気か？決闘前日に襲撃に来たにしては数が少ない。何処かに連れ出して、待ち伏せてる奴等と囲む気か？）

「それで、小雪は俺にどんな用件があって来たんだ？」

「何かねー、トーマがゴールデンウィークは忙しいから大和君と遊んでもらいなさいって」

（やっぱり監視が目的か？今日は親不孝通りで"金剛"の練習をする

つもりだったが…）

同伴を許可すれば"金剛"について報告されるだろう。先日の決闘で見せてしまったとはいえ、拳撃以外の方法は知らない筈。逆に言えば拳撃による"金剛"は当たらないように対策されている可能性が高い。これ以上情報を漏らしたくはないが…

（最近は親不孝通りで暴れ過ぎた。一人だと獲物が寄って来ないかもしれない…）

小雪の性格は知らないが、ルックスは良く男ウケするだろう。バカ共が絡んで来る確率は跳ね上がる。拳撃による"金剛"だけ練習していれば問題は無いか？

「……分かった。俺に付き合ってくれるなら遊んでやるよ」

「おー、やっさしぃー♪それで、何して遊ぼうか？」

「リアル狩りゲーをしようぜ」

２００９年5月2日（土）　朝

●●●●ジム

ゴールデンウィーク明けに決闘を控えた冬馬と準は、ジムで大和の対策を練っていた。

「さて、今日から準には本格的に大和君対策を始めてもらいます。まずはこれまでに集めた情報から、ディフェンスの練習をしていきます」

「ディフェンス？バーリトゥードで多彩な攻撃が可能な試合なら、奇

襲を仕掛けて短時間で勝負を決めた方が良くないか？寝技や蹴り技の対処は上手くないんだ」

「ディフェンスと言っても、絶対に喰らってはいけない技だけですよ。胸を狙った拳撃、いや心臓を狙った打撃は絶対に防いで下さい」

「心臓？」

「ええ、あの打撃は心臓を強打する事で失神させる事を狙った打撃だと思います。" 血管迷走神経反射性失神" と" 心臓性失神" の二種の失神系のダメージで成功率を上げ、一瞬で失神させる。何より恐ろしいのは、心臓震盪を起こす可能性があるという事です」

「容赦無さすぎだろ!!」

「まあ、戦闘による決闘は学長が立ち会いますから死んでしまう事は無いでしょう。それより、この技は準にも使えませんか？」

「……無理だろうな。技の存在を知っている奴に当てるには大振りだし、最悪殺してしまうと理解すると無意識に力を抑えそうだ。どうしても道徳心が邪魔になる」

「そうですか。……では、ディフェンスの練習と奇襲の練習に絞っていきます。まずはディフェンスの練習から始めましょう」

２００９年５月２日（土）　昼

親不孝通り

大和は" 金剛" の練習をする為、小雪を連れて親不孝通りに来ていた。

「ここらへんにモンスターが出るの？」

「そうだ。ボスっぽい奴は先日倒しちまったから出て来ないだろうけど、雑魚モンスターは腐る程出て来る。経験値稼ぎに付き合ってくれりゃ遊んでやるよ」

（さっき葵に聞いた話じゃ自分の身を守れるくらいには強いらしいし、不発になった奴にトドメを刺してもらうか…）

あれから場所の指定も無かったし、監視ついでに遊びに付き合わせる気なのか？誰かに連絡している様子も無いから襲撃の可能性は低い。人を集められなかっただけかもしれないし、決闘の期日直前に襲わせるつもりの可能性もあるが、少なくとも今は襲われる事は無いと考えて良いだろう。

「くっそー、まだ体が痛むぜ。アイツら絶対に許さねぇ!!」

「あれだけ痛い目にあったのに、ケージ君マジパネぇ」

「取り敢えず板垣とかいう奴等も見なくなったし、ここら一帯のヤンキー共をシメて数を増やすぞ!!」

「俺達で一大チームを作るＹＯ!!」

「ストリートファイトナラマカセトケ！」

（手頃そうなバカ共発見。まずはコイツ等から試していくか）

大和は小雪を手招きする。予め確認していた通りに腕を組み、寄り添いながらターゲットに近付いて行く。向こうもこっちに気付くと、ニヤニヤしながら近寄って来た。

「よぉ、ニーチャン。良い女連れてドコ行くんだい？ダメだよ～ここらは治安が悪いんだから」

「俺達と一緒に遊ぼうＹＯ！もちろんネーチャンだけだＹＯ！」

大和は無視して襲う順番を判断していく。

（ＤＱＮっぽいのが二人、気の弱そうな奴が一人にガタイが良い外人が一人か…）

外人は後回し、出来れば他の三人を片付けてから最後に相手したい。恐らくこの外人が連中の中で一番強い筈。先に外人を倒すと他の奴等が逃げる可能性が出て来る。背面でも打てない訳ではないが見せたくないし、時間も掛けたくない。

大和は順番を決めると、小雪を数歩下がらせ両手を上げながら歩を進める。

「なんだそりゃ？降参のつもりか？いいから財布置いて早く失せろ!!」

ＤＱＮの一人が大和に掴み掛かろうと左腕を伸ばしてくる。反撃は無いと思っているのか、酷く緩慢な動きだ。

（両手を上げただけで油断しやがった。こんな所に居るんだから腕に覚えがあるに決まってるだろ）

伸ばされた左腕は叩き落とされ

大和の右腕が心臓に突き刺さった

『心臓を叩いていくから、気絶していない奴にトドメを刺してくれ』

事前に確認した通りに下がった小雪は、大和が一人目の心臓を殴ったのを見ると一変する。直ぐに追撃を掛けられるように体勢を一瞬で変える。

(最初の人は気絶している…)

大和が一人目が倒れる前に二人目の心臓を殴り、次のターゲットに移行すると一瞬で気絶していないのを確認し、素早く頭部へ蹴りを放つ。鼻が潰れ出血しながら後方へ転がったのを確認し、大和が三人目のターゲットを気絶させたのを視界に納める。

(…あ、外人が殴り掛かった)

最後に残った外人は流石に先手を取れず、大振りの打撃を捌いてから指を使った"目打ち"で視界を潰し、"金剛"を打ち込んだ。外人が気絶したのを確認した小雪は、鼻を押さえて転がっているＤＱＮの顔面を踏み潰した。

一人目の心臓を殴ってからたった６．１３秒の攻防。その短い時間で正確に気絶しているか判断出来る超人的な動体視力と強力な蹴り技。態度にこそ出さないが、攻防を終えた大和は小雪の実力に動揺していた。

(おいおい……誰だよ自分の身を守れる程度には強いって言ってた奴

は。滅茶苦茶強いじゃねえか）

一人しか失敗した奴がいなかったとはいえ、普通一瞬で気絶したかどうかなんて判断出来ねえだろーが。予想じゃもう少してこずると思っていたのに、蹴りを放つまでスムーズに動き周囲を見渡す余裕まである。

（こんな奴がまだ隠れていたのか…）

コイツは間違いなく葵の決闘での助っ人候補だった筈、今日俺の所に来させたという事は他の奴に助っ人を頼んだのか？その助っ人はコイツより強いのか？

様々な疑問が頭に浮かぶが、解く為の判断材料が無いのに解ける訳もない。

（……ゴールデンウィーク明けの決闘、予想より苦戦しそうだな）

２００９年５月２日（土）　午後
川神院

板垣辰子との戦闘でダメージを負った鉄心は、川神院で大人しく修行僧達の訓練を見ていた。ルー師範代と釈迦堂、そして板垣姉妹はゴールデンウィークの間は山籠り。孫の百代と一子も明日から旅行に出かける為、準備をしていて院には居ない。

（板垣姉妹と釈迦堂が川神院に来てから、百代の機嫌が良い日が続いておる。相変わらず戦う事しか考えていないようじゃ）

百代の考えている事は分かりやすい。大方釈迦堂の怪我が癒えるのを待ちつつ、板垣辰子の成長に期待しているといったところか。あ

の様子じゃ釈迦堂が回復した途端に勝負を挑みそうじゃな。

（…そして、最近急に動き出した直江大和。ルールの無い喧嘩で釈迦堂相手に一対一（タイマン）で勝った実力は本物と見て間違いあるまい）

釈迦堂から聞いた話では、板垣竜兵の件も直江が仕組んだ可能性があるという。確証を得る事こそ出来なかったようじゃが、そう思わせる相手だという事はワシも感じた。駆け引き、策略等に長け、周到に準備しておく事で格上の相手とも渡り合う。何より窮地を脱する術に長けていると釈迦堂は言っておった。最近になって動き出したのも何か理由がある筈。

（……近いうちにまた四天王が交代するかも知れんのう）

２００９年５月２日（土）　夜
歓楽街

ＤＱＮ四人組を撃退した後、更に複数のグループの不良達を撃退した大和は、小雪を家の近くまで送ってから歓楽街に来ていた。

（ボコッた奴等の携帯で俺の写メを撮っておいたから、早ければ今夜にでも人数を集めて仕返しに来る筈だ）

本番はこれから、昼間の狩りは獲物を大量に誘き寄せる為の準備運動に過ぎない。最近はよくこの辺りを彷徨（うろつ）いているし、直ぐに集まって来るだろ。

「!?おい、アイツじゃねえか!?」

「写メに写ってる奴だ!!俺達を舐めた事を後悔させてやれ!!!!」

（声がでけえよ。不意討ちを警戒してた俺が馬鹿みたいじゃねえか）

数はざっと数えて二十人くらいか。アイツなら遊びで撃退出来るのだろう。岳人も何だかんだで倒せそうだよな。

（こういう対抗心は策を講じるときは邪魔になるが、モチベーションを上げるにはもってこいだな）

大和が練習しようとしているのは

"金剛"だけではない

（今日から"悪餓鬼（ワルガキ）"大和君の復活だ）

２００９年５月２日（土）　夜

榊原家

『そうですか。やっぱり大和君は心臓を打つ技を会得していましたか』

「うん♪最初の方は失敗する事もあって僕も攻撃出来たけど、最後の方はみーんな気絶しちゃうから暇だったな～」

『それは残念でしたね、ユキ。それより、大和君はどうでした？私や準以外の人と遊ぶ事は滅多にないですし、これを機に友達を増やしてみてはどうですか？』

「ん～？良い人だとは思うけどトーマと準だけでいいかな？優しいけど、ちょっと怖く感じるときがあるし」

『そうですか。ユキが大和君と親しくなったら大和君とデートに行こ

うと思っていたのですが、残念です』

「(@　□　@;)!!」

２００９年５月２日（土）　深夜
歓楽街

二十人程居た不良も、一人を残して皆倒れ伏している。大和の"金剛"で失神し倒れている不良達は、戦場で息絶えた兵士のようにピクリとも動かない。

「な、何なんだよお前。板垣とかいう奴等が居なくなって、やっと好き放題出来ると思ったのに」

「何言ってんだ?此処等で顔役やってたのは俺が先だ。数年来なかったくらいで忘れるような頭だから駄目なんだよ、お前等。それともモグリだから知らないわけ?」

「…?意味がわからねえ。てめえが誰かなんて知る訳ねえだろーが!?」

「"悪餓鬼"大和君を知らないとか、お前絶対モグリだろ」

「……ぁ、いや、でも髪の色も違うし、そっくりさんの可能性も…」

「イメチェンだ、そのくらい理解しろボケ!!」

大和は叫びながら不良に向かって駆け出す。対する不良は右手でナイフを取り出し、利き手であるだろう右手を大和に向けて突き出す!!

（好都合だ、わざわざ右の脇腹を空けてくれるとは）

大和が一人だけ敵を残していた理由は、"金剛"以外の技を試したかったから。その技は一対一を想定した技の為、一対多の喧嘩では使えない。

大和は突き出されたナイフが左肩の上を通るように避けながら踏み込み、左腕で空いた脇腹を狙った。

（肝臓を狙った鉤突きから繋げる!!）

その技の名は

"煉獄(れんごく)"

大和の"金剛"が決まる確率が跳ね上がった！

大和は"煉獄"を繰り出した！

君がッ　泣いても　殴るのをやめないッ！

井上準
川神学園2年S組所属

葵冬馬、榊原小雪と仲が良いロリコンハゲ。自尊心の高い生徒が多いS組では珍しく人当たりが良い好青年にして変態紳士。『一緒にお風呂に入ったりしたい』等の危険な発言もあり、似非紳士の疑惑あり。続編が出る度に対象年齢が下がっていると思ったのは作者だけではない筈。

"煉獄"とは

片手型
・裏拳（鳩尾）
・裏打ち（顔面）
・鉄槌（金的）
・肘打ち（側頭部）
・手刀（顔面）

両手型
・鉤突き（脇腹）
・肘打ち（側頭部）
・両手突き（顔面＋金的）
・手刀（首）
・貫手（鳩尾）

片足型
・下段廻し蹴り（膝関節）
・中段廻し蹴り（脇腹）
・下段足刀（膝）

・踏み砕き（足甲）
・上段足刀（顎）

両足型
・左下段前蹴り（膝）
・右背足蹴り上げ（金的）
・右中段前蹴り（下腹）
・左中段膝蹴り（鳩尾）
・右上段膝蹴り（脇腹）

片手片足型
・肘振り上げ（顎）
・手刀（側頭部）
・鉄槌（脳天）
・中段膝蹴り（鳩尾）
・背足蹴り上げ（金的）

両手両足型
・左上段順突き（顔面）
・右中段掌底（鳩尾）
・右上段孤拳（顎）
・右下段廻し蹴り（膝関節）
・左中段膝蹴り（脇腹）

両手両足頭型
・右中段廻し蹴り（脇腹）
・左上段後ろ廻し蹴り（側頭部）
・左中段猿臂（えんぴ）（胸部）
・右下段熊手（金的）
・右上段頭突き（顎）

以上の三十五手の組み合わせで出来た連打

左右対称の動きも合わせると七十手にも及ぶ五手のパターンを選択して打ち続ける事で、相手の反撃を許さずに一方的に殴る事を可能とした技である。三打を綺麗に続けて入れれば、あとは体力の続く限り打ち続ける事が容易に出来る。

２００９年５月２日（土）　深夜
歓楽街

肝臓を狙った鉤突きを喰らった不良は、痛みと苦しさからナイフを落とし倒れまいと両足を広げて踏ん張った。

「!?ぐぇ…」

時間にすれば1秒にも満たない一瞬。前屈みになり視界が下がった不良の死角から、大和の肘打ちが側頭部に飛んで来る。

ゴゴッ

間髪入れずに両手突きが顔面と股間に命中する。不良は既に、自分が何を喰らったのか分からない程視界が動き、反撃も儘(まま)ならないくらい体勢が崩れている。"煉獄"で一番難しい初手～三打を綺麗に打ち込んだ今、不良が"煉獄"から逃れる術は無くなった。あとはひたすら連打が止むのを祈るしかない。

手刀、貫手、肘振り上げ、手刀、鉄槌、中段膝蹴り、背足蹴り上げ、左上段順突き、右中段掌底、右上段孤拳、右下段廻し蹴り、左中段膝蹴り、裏拳、裏打ち、鉄槌、肘打ち、手刀……

初手の鉤突きから1分程経った頃、大和の"煉獄"は不良が崩れ落ちると同時に終わった。

「ッハァー、ハァー、きっつ～」

（とりあえず限界まで打ち続けてみたが、1分ちょっとが今の限界か）

さっきの"煉獄"の課題は

・繋ぎ目のトコで考えてしまい、技を繰り出すタイミングが遅れる。

・呼吸を入れるタイミングが掴めず、息を止めたまま打ち続ける時間が長過ぎた。

（繋ぎ目を消す事と呼吸を入れるタイミングを掴む事が出来れば、もっと余裕を持って打ち続ける事が出来そうだな）

あとは寝ている奴等全員の携帯を使って、俺の写メを持っている奴等を誘き寄せる。敵を誘き寄せる事に成功した以上、証拠になりかねない写メを残しておく理由は無い。携帯を止められる前に写メを全て削除し、他にデータが移されていないか確認する。今夜中には終わらせる。

（全員の携帯を没収し、リーダー格っぽい奴を一人拉致して拷問で吐かせるか）

警察に通報されると面倒だ。コイツらも凶器準備集合罪等の犯罪を犯していたから通報される可能性は低いが、念の為没収した携帯は全て破壊して、証言以外の証拠は全て消す!!

２００９年5月3日（日）　朝

宇佐美代行センター

「それでこの携帯を処分してほしいって、…全部でいくつあるんだよコレ!?」

「全部で３９ある。抜き取る時は指紋も残さないように手袋を嵌めてたし、誰にも目撃されなかった。俺の外見が分かるようなデータは全て削除したから、あとは携帯そのものを破壊するだけなんだよ。なんならバイトを手伝うし、勿論ゲンさんと代わった日以外で」

自分に関するデータを全て削除した大和は、不良達から抜き取った携帯の処分を宇佐美巨人に依頼していた。二十人の携帯から自分を探している奴等の情報を引き出し、一人だけ拉致した不良を脅して釈迦堂と戦った時の廃ビルに誘き寄せ殲滅した。

「……別に構わないんだけどさ。お前さん、最近暴れ過ぎたから噂になってるぞ。板垣姉弟をヤったのもソイツじゃないのかって」

「問題無い。どうせ暫くは練習相手に事欠かなくなる。バイト以外じゃ近寄る事もない」

「そっか。ということは、ようやく目処がついたってところか？」

「ああ、何とか今年中には達成出来そうだ」

「そいつは何よりだ。オジサンも色々と手を貸した甲斐があるってモンだ。どうだ？卒業したらウチで働かないか？」

「断る！俺には内閣総理大臣になって日本を立て直すという使命があるからな!!」

「そりゃ残念だ。んじゃ、今のうちにコキ使ってやるとするか。今夜

ボディーガードの依頼があるから、今のうちに寝とけ」

「了解だ。時間になったら起こしてくれ」

「ここで寝るのかよ!?」

２００９年５月３日（日）　昼

●●●●ジム

「蹴られまくって腕が痛い。ユキ、もう少し手加減してくれ」

「え～、大和のキックはもっと痛いよ？」

（蹴り技の対策にユキとスパーリングをさせてみたのは良いですが、やっぱり慣れるまでに時間が掛かりそうですね）

上手くいけばカウンターを狙えるかと思いましたが、ボクサーの準には少々難しい様子。蹴りに対する防御が不得手な為、カウンターはリスクが高過ぎる。

（大和君は絶対に調べあげてくるでしょう。準が拳闘（ボクシング）をやっている事は既に知られていると考えた方が良い…）

スタンディングでの殴りあいに展開する可能性は低い。グラウンドを狙うか、蹴り技主体で攻めてくる可能性が高い。寝技や組技では敵わない以上、長引けば此方が不利になるばかり。準も言っていたように奇襲を仕掛けて短時間で勝つしかない。

（流石に女性を自分の代わりに戦わせるのは気が引けますし、大和君は女性でも容赦なく攻撃しています。準に頑張ってもらうしかないのが辛いところですね）

２００９年5月3日（日）　夜
宇佐美代行センター

「おい、起きろ！そろそろ準備して歓楽街に向かうぞ」

「？……ああ、そういえばボディーガードのバイトがあったね。ゲンさんも一緒なの？」

「ああ、今回の依頼は俺と親父、お前の三人でやる。行きがけに葵冬馬に関しての報告をするから顔洗って来い」

「了解」

（向こうに何か動きがあったのか？）

歓楽街へ向かう途中、車内で巨人と忠勝と大和は依頼内容を確認する。

「さて、今回の依頼はキャバ嬢をストーカーから守って、ストーカーを警察に突き出すのが仕事だ。店を出たキャバ嬢と同伴してストーカーを煽る奴が一人。ストーカーを後方から尾行する奴が一人。随時状況を知らせる奴が一人。役割は同伴者が大和、尾行担当が忠勝、連絡役が俺だ。何か質問はあるか？」

「ストーカーの目的は分かっているのか？仮に殺害や強姦を目的としているなら、俺が同伴してたら出てくる確率は下がるだろ？」

「確実とは言えないが、交際を強要するのが目的だろう。キャバ嬢自

身、ストーカーに心当たりがあるらしい。恐らく以前もストーカーしていた男だと言っていた。警察に突き出す理由も、最近行動がエスカレートしてきたからだ」

「人数は？一人と思って良いのか？」

「集団で来る事は無いだろ。一人か二人仲間を連れて来る可能性はあるが、その時は依頼人の護衛を最優先しろ。イケるようなら忠勝がストーカー優先で捕縛しろ。首謀者を捕らえれば、あとは金で雇ったであろう仲間だけ。逃げ出す可能性が高いから深追いはするなよ」

「そもそもストーカーが依頼人の妄想である可能性は？」

「それもまずないだろう。同僚のキャバ嬢達から話を聞いたが、不審な男を店の周辺で見たり依頼人の携帯が短時間に何度も鳴っているのを見ている。ストーカーは間違いなく存在する」

（電話番号を知っているって事は、ストーカーは依頼人の知り合いって事か？……まあ、俺達は仕事を遂行するだけだしどうでもいいか）

「質問が無いなら仕事の話は終わりだ。次は俺が集めた、葵冬馬に関する情報を報告する。ここ最近奴が接触した人物の中で、お前との決闘で助っ人になる可能性が一番高いのが井上準、次いで榊原小雪だ。井上は拳闘をやっているらしく、殴りあいに強く身長もお前より高い。お前の"金剛"は大振りだから当たらないと思え」

（拳闘…ボクシングか。こりゃマジで"金剛"は当たらんかもな。蹴りによる"金剛"ならともかく、基本の拳撃によるパターンが当たらないのは面倒だ。一発で倒すのは無理っぽいな）

「そして榊原小雪だが、こっちはテコンドーの使い手で蹴り技が強力

だ。掴み所が無い性格をしているらしく、お前としてはコイツの方が厄介かもな」

（あの白髪の女か。確かにアイツは何を考えているのか読みづらい。そういう意味では井上（ハゲ）より厄介だな）

「……分かった。ゲンさんは引き続き葵冬馬周辺の監視と調査をお願い。特に井上に関する情報が欲しい」

「了解だ。それじゃ、仕事に集中しろよ」

２００９年５月３日（日）　夜
川神市周辺の山中

板垣姉妹の更正の為山籠りをしているルーと釈迦堂は、川神水を飲みながら雑談をしていた。

「初めての山籠りで疲れたのか、板垣達ハ眠ってしまったネ」

「今時のガキが山籠りなんてやった事ある訳ねえだろうからな。俺はまだダメージが残っているからリハビリ程度だが、アイツらは軽傷で済んだからってシゴキ過ぎなんだよ」

「彼女達ハまだまだ若い。数日で適応出来ると思うヨ。それより直江大和と戦った時ノ事を話してくれ。川神院だと百代や一子、板垣姉妹に聞かれるから今しか無いンだよ」

「ア～、面倒臭えなぁ。……んー、一言で言えば逆境に強く容赦がない。あと、俺が戦った時はかなり禍々しい気をしていたな。気を使った技は出来ないみたいだったが、体術はかなりのモンだし身体も鍛えているのがよくわかる。武道家というより破落戸（ならず者）、無法者の方がしっ

くりくるな」

「昔のお前ニそっくりだな」

「バァカ、俺の方が可愛いげがある。アイツは三回も目潰ししてくるとか、階段の段差を使って頭から落とすとか殺す気満々の攻撃してくるんだからよ。…それより、お前こそ一子達から直江大和に関して何か聞いてないのか？」

（俺の考えじゃ、竜兵はアイツに絡むように仕組まれていた。何の為かは分からないが、直江が仕組んだとしたら必ず理由がある。アイツの目的が分かれば、目的を邪魔する形で喧嘩を仕掛ける事が出来るかもしれない）

「一子達からは特に変わった事は聞けなかったけド、直江大和の素性を調べたラ中学時代ハかなりヤンチャしていたらしいネ。そして、妙な時期に大人しくなってル。今から二年と半年程前だから受験を意識したにしては少し早いシ、この時期に何かあったのは間違いないト思うヨ」

（そういう話は百代の方が詳しいよな。旅行から帰ったらそれとなく聞いてみるか。ジジイにはバレないように気を付けろと言われたが、生憎俺は負けっぱなしで引き下がる程大人じゃない）

『待ってろよ、直江大和』

歓楽街の治安がちょっと良くなった！

僕が彼に懐く理由

川神一子
川神学園2年F組所属
川神院の総代、川神鉄心の孫。川神百代の妹にあたる。忠勝と同じ児童養護施設"白い家"の出身で旧姓は岡本。里親が亡くなったのを切っ掛けに川神院に引き取られる。天真爛漫(てんしんらんまん)、アホの子、マスコット。渾名(あだな)はワン子。夢は川神院の師範代になり、総代となるであろう姉、百代のサポートをする事。
勇往邁進(ゆうおうまいしん)!!ι(´ロ`)ノ

―――――――――――――――――――――

『うむ。冬馬は自慢の息子よの』

『お前なら、私のようになれるさ』

『おおお！冬馬！早くもそのファイルを見つけられたか！偉いぞ！』

『何が表で何が裏か…世の中面白いだろ冬馬』

『冬馬。お前なら私が築き上げたこの病院の表も裏も、全てを安心して継がせられる』

『小さなモノから少しずつ、悪い事をしていこう』

『さぁどんどん知識を身につけて悪い事したりいい事したりしよう、どんどんどんどん』

『はっはっは大丈夫。お前なら私のようになれるさ』

『――なんたって…』

『私の血を引いているもんな！』

２００９年５月４日（月）　夜明け前

親不孝通り

依頼を無事に成功させた大和、忠勝、巨人の三人は帰途に就いていた。

「いやぁ～、今日も働いちゃったねえ。キャバ嬢のお姉さんも喜んでたし、一件落着!!」

「お前さんはキャバ嬢の姉ちゃんとイチャイチャしていただけだろ。忠勝は良くやったな。ストーカーだろうと怪我が無い方が良いに決まってるからな」

「怪我の程度によっては、こっちが訴えられる可能性が出てくるからねえ。流石ゲンさん、頼りになるぅ～」

「よーし、お前ら、風呂に入っていこうぜ。オジサンが奢ってやる」

「…？この辺に銭湯なんてあったか？」

「おう、泡の風呂だがな」

「いらねぇよ！」

「ガチか…理解はするが俺は勘弁してくれよ」

「違う、好きな奴はいる」
「……」
「そいつをこんな所で思い出すのも嫌だぜ…」
「純なのな、直江はどうする？」
「俺も止めとくわ、初めては惚れた女にって決めてるから」
「お前ら見かけによらず純情だな。じゃあ、俺だけ行くわ」
「行くのかよ！」
「薬は持ってる。これで硬さと持続力は完璧だ」
「んなこと訊いてねえ」
「じゃあな、気を付けて帰れよ」

巨人が一人で風呂に行った後、大和は余計なお世話と理解しつつも忠勝に話し掛けた。
「ゲンさんがさっき言ってた好きな奴ってさ、ワン子の事だよね？」
「……」
「告白とまではいかなくても、アタックを掛けたりしないの？」

「……」

「あまり人の恋路に口を出したくないけど、ワン子が相手なら先(ま)ずは好意を伝えないと何も始まらないと思うよ」

「……」

「……まあ、俺に出来る事があれば言ってくれよ。今は九鬼しか告白して来てないけど、多分ワン子はモテるから口説くなら少しでも早い方が良い」

「……」

「んじゃ、早く帰って寝ようぜ。最近生活リズムが滅茶苦茶だから眠くてしょうがない」

(……我ながら女々しいぜ)

こっちが面倒見ているつもりが、痺れを切らして向こうが世話を焼こうとしている。俺が一子に好意を持ってる事を見透かされ、行動に移らねえからと急かしてきやがった。アイツも一子とは長い付き合いだから思うところがあるんだろう。

『タッちゃーん!!』

(見守ってるだけでいいと思ってたが、俺にとっては自分で幸せにしてみせるのが一番だよな)

「おい、直江」

「ん～、何？」

「……ありがとな」

２００９年５月４日（月）　夜
箱根の旅館

「大和とゲンさんをファミリーに入れたいからお前ら意見を出していけ！」

「「「「「……ハ？」」」」」

夕食を終えゆっくりしていた時の事。箱根に旅行に来ていた風間ファミリーは、翔一のいきなりの発言に一瞬呆けた。

「おいおいキャップ、いきなりどうした？先日クリスとまゆっちが加入したばかりじゃねーか」

「別にいきなりじゃねーぞ。大和とゲンさんは前から誘ってるんだ。クリスとまゆっちが加入して女が五人、男が三人になっただろ。どうせなら後二人男を入れて、五人五人にしてぇなぁと思っただけだ。ホラ、ドンドン自分の意見を出していけ！」

「まあ俺様は特に反対しないぜ。大和は昔から知ってるし、ゲンも強面だが性格は悪くねえ。女子の方が強いってのもカッコがつかねえし、アイツらなら打って付けだ」

「僕も特に反対する理由はないかな。クリスやまゆっちの時とは違って、ある程度どんな人柄なのか分かってるしね。ただ、あの二人がすんなり入るとは思えないなぁ」

「アタシは賛成するわ♪大和もタッちゃんも雰囲気は恐いけどいい人達よ！まあ、モロの言うように入ってくれるとは思えないけど…」

「私は反対かな。二人とも悪い人とは思わないけど、深く交流するのは危険だと思う。親不孝通りとか治安の悪い場所によく行くみたいだし、今まで通り浅い付き合いの方が良いんじゃないかな？」

「自分は直江の軽い性格が気に入らん。源殿はいい人だが、アイツは小細工はするし嘘もつく。反対だな」

『クリ吉は反応（リアクション）が面白いからからかわれてるんよ』

「わ、私は賛成です。確かにお二人共少し恐いけれど、いい人達です！大和さんだって一見軽く見えますが、気遣いも出来る優しい人です」

「……」

「今のところ賛成が三人、反対が二人、様子見が二人か。モモ先輩は？」

「……私は反対だな。特に、直江は私がいる限り絶対に入らないだろ。」

そう言うと百代は、部屋を出ようと立ち上がった。

「アレ？モモ先輩何処行くんだ？」

「ちょっと夜風にあたって来る。後は勝手に決めてくれ」

「珍しいね、モモ先輩が反対するの」

「そもそも大和とモモ先輩が面識あったなんて知らなかったぜ。ワン子は知ってたか？」

「う、うん。…お姉様と大和、喧嘩した事があるらしくて…島津寮や２年の教室に近寄らないのも多分それが原因だと思う…」

「モモ先輩と喧嘩って…無謀ってレベルじゃねーぞ。よく生きてたな大和の奴」

「喧嘩っていっても口喧嘩とかでしょ？流石に暴力でモモ先輩に勝とうなんてしないだろうし…」

「…それがね…喧嘩を売ったのはお姉様からしくて。強い問題児がいるらしいって話を聞いて喧嘩を吹っ掛けたって…」

「「「「「……（；・３・）」」」」」

「私はその時の喧嘩で負けた大和が入院して初めて知って…お姉様にかなりキツく言っちゃって…それ以来お姉様から勝負を申し込む事はかなり減ったわ…」

「それ、ルー先生や学長は知ってるの？」

「知らないと思う。私は大和に口止めされてて言ってないし。入院していた期間も大和が途中で抜け出したからかなり短いし…お姉様が素人相手に喧嘩を吹っ掛けた事すら知らないんじゃないかな？」

「キャップ、どうやら大和を誘うのは無理があるみたいだぜ…」

「流石に喧嘩した相手と同じグループには入りたがらないよね」
「そーだな、下手に事情を探ろうとすれば大和の事だ。余計なお世話だ！とキレられかねない。この話は極力触れないようにしよう」

２００９年５月５日（火）　夕方
駅前商店街　梅屋

葵冬馬は珍しく一人で行動していた。正確には人に会う為に、一人で待ち合わせ場所に来ていた。
（この店に居る筈ですが…）
「おい！こっちだ、こっち！」
待ち合わせ相手と思(おぼ)しき男が冬馬に呼び掛ける。待ちきれなかったのか、それとも待つ気はなかったのか、既に豚丼を食べている。
「久しぶりだなぁ。最近ちょっと忙しくて会えてなかったからな」
「そうですね。相変わらず息災なようで安心しましたよ。釈迦堂さん」

山籠りを終えた釈迦堂は、葵冬馬からの呼び出しもあり久し振りに梅屋に来ていた。
「……そうですか。板垣姉妹と共に川神院で行動を制限されていたと」

「ああ、竜兵の奴はまだ逃亡しているようだが暫くは動けねえだろうな。アイツも結構ボコられてたし、俺や辰子達もまだダメージがある。何よりルーや鉄心の爺さんに警戒されている事が問題だ。"カーニバル"の実行は難しいかもな」

「……仕方ありません。私達が甘かったのでしょう。まさか釈迦堂さんが負けるなんて思ってもいませんでしたし、竜兵にも"カーニバル"が始まるまでは大人しくしているように言っておくべきでした。改めて思い知りましたよ。この世に絶対は無いと」

「だな。俺もまさか負けるとは思ってなかった。だから負けちまったんだが…」

(そう、負けるとは思ってなかった。自分が負ける可能性を考えなかったから、最後の攻防で競り負けた)

今にして思えば、直江大和は自分より強い相手に勝つ為に努力していたのだと思う。問題は努力し始めた理由だ。ルーから聞いた話じゃ昔から強かったみたいだし、竜兵のように努力しそうにない。何れにせよ、もっと調べる必要がある。

「それより、釈迦堂さんに勝ったのはどんな人だったんですか？川神院の人間ではないんですよね？」

「お前と同じ、川神学園の生徒だよ。名前は直江大和っていうんだが知ってるか？」

「!?」

２００９年５月６日（水）　深夜
親不孝通り

振替休日を含めたゴールデンウィークの最終日。大和は宇佐美巨人と共に親不孝通りで夜回りをしていた。

「よりによって此処かよ。ガラの悪い奴等は粗方ボコってんだけど」

「まあこれも仕事だ。やらないって訳にはいかない。噂じゃ妙なクスリも出てきてるって話だ。サボるなよ」

「へーい」

「結構見て回ったが、クスリを売ってる奴は見なかったな。川神学園（ウチ）の生徒も夜遊びしてないみたいだし、今日はもう帰るか」

「明明日ボる気の奴等くらいだろ。連休の最終日に夜更かしするような奴は。クスリの方は今後も注意する必要があるだろうけど」

「騒がしくなれば警察が動くだろ。オジサン達はあくまで一般人なんだから、仕事以外で関わるなよ」

「分かってる。大事な時期に余計な事に首を突っ込むような事はしねえよ」

（そうさ、余計な事をしている暇は無いんだ。川神百代は卒業したら武者修行に出る！）

アイツの事だ、強者を求めて世界中を飛び回るに決まってる。確実に接触出来る今年度が最後の好機（チャンス）だと思え。予定では８月中に倒すつもりだが、予定通りに事が運ぶとは限らない。余計なリスクを負っ

ている余裕は無い。

「ならいい、忠勝にもそう言っといてくれ。…そういえば直江、お前は忠勝にかなり懐いてるが、忠勝の何処が気に入ったんだ？」

「……？どういう意味だ？」

「いや、俺が言うのもなんだが忠勝は誰に対しても無愛想だろ。人付き合いも消極的で不器用な接し方しか出来ない。普通なら最低限の付き合いで済ませるようなタイプの人間だ。親としては嬉しいが、理由が分からないから不思議に思ってたんだよ」

「……理由ならあるぜ。ゲンさんは俺にとってある意味理想なんだよ」

「理想？忠勝とお前はあまり似てないだろ。典型的な不器用な奴と、要領よく立ち回る奴。理想と言われてもピンとこないな」

「放っとけ。少なくとも、俺はゲンさんを尊敬している。知り合えて良かったと思っている」

（そう、本当に尊敬している。…俺は親父のようにはならない！）

「……そうか。なら、これからも仲良くしてやってくれ。アイツも態度こそアレだが、楽しんでいるみたいだしな」

「言われるまでもない」

（…ん？葵からメールか）

「どうした？何か問題でもあったか？」

「いや、何でもない。それよりさっさと帰って寝ようぜ」

『決闘の日時を決定しました』

『5月8日、明後日に決闘を行いたい』

ロリコン、殺すべし！…慈悲はない

九鬼英雄
川神学園２年Ｓ組所属
大企業、九鬼財閥の御曹司。超絶俺様主義者にして常時上から目線様。周囲の反感を買いそうなキャラだが、委員長としてクラスメイトを気にかけたり、民の幸せを願い行動している等、決して悪い人物ではない。濃いだけ。川神一子に惚れており、猛アタックを掛けている。

……一子本当にモテモテだな。

２００９年５月８日（金）　昼
川神学園　グラウンド

昼休み、４月に不死川を倒した大和と、学年主席の葵冬馬が決闘を行うという噂は瞬く間に広まった。柔道の全国区を丸腰で秒殺した大和はそれなりに注目されており、同学年のみならず全学年の生徒達がグラウンドに集まっている。その中には川神百代や黛由紀江といった武道家は勿論、九鬼英雄や不死川心のような大物達も見に来ている。

「あずみ！お前は直江大和と準、どちらが勝つと思う？」

「はい、英雄様！体格では若干井上さんが優ってますが、直江さんの以前の決闘を見る限り厳しい戦いになるかと」

「ほう、意外であるな。てっきり所詮Ｆ組では敵わないとでも言うかと思ったが…」

「不死川さんもアレで全国区の実力者。そんな相手を秒殺している以

上、油断出来るような相手ではありません」

「……では質問を変えるぞ。お前なら直江大和に勝てるか？」

（不死川との決闘を観ただけで断定は出来ないが、直江の奴は他の武道家とは毛色が違うからな）

「…少なくとも、丸腰では勝てません」

（自信家のあずみがここまで言うか。是非とも九鬼に欲しくなるわ！）

今回の決闘は事前に連絡があった為、簡易なリングと両選手にオープンフィンガーグローブが用意された。リングは四隅に鉄柱を刺し、鎖で囲っただけの無骨なリング。学生同士が戦うにはやや不似合いなソレは、不気味な雰囲気を醸（かも）し出している。その雰囲気の為か、ギャラリーはいつもより多い。

川神学園の学長、川神鉄心は自分達が用意したリングに対する生徒達の反応を窺（うかが）っていた。

「ふむ、やはりリングを設置した方が盛り上がりそうじゃの。このくらい簡易なリングなら時間も費用も大して掛からんし…」

（川神学園の方針は切磋琢磨、生徒達の競争意識を高めるのもワシらの仕事じゃからの）

「クリスと一子の決闘から立て続けに決闘が行われていますシ、今の学園の空気は正に切磋琢磨と言えまス。私達教師が怪我に対して気

を付けていれば問題無いかト」

「うむ。この決闘の結果次第では、他にも何か考えてみようかの」

(鎖が思ったより張ってるな。ロープのようにたわみそうにない。コーナーからの脱出はかなり厳しいな)

大和はリングに入ると、鉄柱と鎖をさりげなく調べていく。鎖の張り具合、強度、鉄柱に体重を掛けしっかり刺さっているかまで。

(マットも無い。パウンドされたら即止められそうだ)

「それじゃセコンドよろしくね、ゲンさん。万が一劣勢になっても、タオルは絶対に投げないでくれよ」

「おう、せいぜい死なない程度に頑張りやがれ」

一方、葵冬馬と井上準は最後の確認を行っていた。

「準、体調はどうですか?」

「今のところ問題無いぜ、若。グローブのサイズもピッタリだ」

「戦闘が始まる直前、もしくは直後に効果が出始める筈です。…後は任せましたよ」

風間翔一をリーダーとしている風間ファミリーの面々も決闘を見に来ている。

「大和が立て続けにS組の生徒と戦うとはな。モモ先輩はどっちが勝つと思う？」

「ルールが緩いからな。喧嘩馴れしている直江が有利だろう。武器無しで勝てる奴は2年ではいないだろうな」

「おお、意外に高い評価だね。もっと低く評価してると思ってた」

「じゃあガクトとはどっちが強いのかな」

「おいおいモロ。そんなもん俺様の方が強いに決まってるだろーが」

「直江」

「即答されたね」

「ちきしょおぉぉ!!」

両選手がリングに入場すると、川神鉄心によるルールの説明が行われる。

「これより決闘の儀を行う。内容は武器無しの戦闘、反則事項は噛みつき、目突き、金的、頭髪を掴む、後頭部への打撃のみ。決着が着いたと判断したら即止めるが、今回はリングを用意したのでセコンドのタオル投入による棄権も認めておる。それでは二人とも名乗りをあ

げい！」

「2年F組、直江大和」

「2年S組、井上準だ」

「いざ尋常に、はじめいっ!!!!!!」

川神鉄心が叫んだ直後、大和が井上に向かって駆け出す。地を這うような低い体勢から、井上の腰に左肩からタックルを仕掛ける。井上は腰を落とし大和の肩を右腕で止め、左腕で顔面へアッパーを放つ。

（顔面への攻撃は読んでるぜ！）

大和は顔面近くに待機させていた右手でアッパーを掴むと、左腕で井上の右足を掬いにいく。井上は両腕を使ってがら空きの頭部へ右フックを放とうと肩から右手を離した。

（今だ！）

その瞬間大和は頭を井上に押し付け

井上の顎を狙った打撃が放たれた

2日前

2009年5月6日（水）

●●●●ジム

「事情が変わりました。一刻も早く決闘を終わらせる必要があります」

梅屋で釈迦堂と会った翌日、葵冬馬は井上準に方針を変更すると伝えた。

「急にどうしたんだ、若？」

「釈迦堂さんが大和君に負けてしまったそうです。このまま嗅ぎ回られていたら、いずれ"カーニバル"の情報が漏れてしまう可能性があります」

「!?…マジかよ」

「"カーニバル"は中止。最も反対するであろう竜兵は失踪していますし、"ユートピア"もまだまだ流通していない。板垣姉妹と釈迦堂さんも川神院に拘束されてますから実行する事も出来ない。運が悪かったと諦めましょう。後は大和君が嗅ぎ回っていますが、決闘さえ終われば私達に関して調べ続ける事も無いでしょう」

「とはいってもこのまま戦っても勝つのは厳しいぜ。何か考えないと…」

「川神学園の決闘はあくまで学生同士の勝負事。怪我に対するチェックやフォローには定評がありますが、ドーピング検査等は行われていません。そして私達は幸い医者の息子、知識はありますし入手も不可能ではない」

「……なぁ、若。そこまでして勝たないといけない決闘なのか？」

「当然ですよ、準。彼には私達の邪魔をした報いを受けてもらわないといけないんですから」

２００９年５月８日（金）
川神学園　グラウンド

密着状態で両腕を使えない体勢から大和が繰り出した打撃は、ボクシングでは反則になる技。頭部を使った打撃、頭突き（バッティング）。掬い上げるように頭部を振り上げ、がら空きの顎をかち上げ死角を作りグラウンドに移行する。

…筈だった

（…！頭突きか⁉）

興奮剤で中枢神経を興奮状態にさせている井上の集中力は、至近距離からの予備動作すら無い頭突きを見切った。直前で仰け反るように躱（かわ）し、逆に大和の顎を右アッパーでかち上げた。

（⁉何で…）

避けられたのか？そう思う前に井上の左ストレートが大和を吹っ飛ばした。

「浅いな」

一見派手に殴られたように見えるシーンだが、ある程度腕に覚えのある者は大和が威力を殺す為自分で跳んだ事を見抜いている。しかし、川神百代はそれより頭突きを躱した井上の反応が気になっていた。

（見てから避けようとしても間に合う訳がない。肩から手を離した直

後から1秒経ってないんだ。確実に当たるタイミングだった）

「アレ？ハゲの奴追い打ちしねえな。マウント取るチャンスなのに」

「派手に吹っ飛びはしたが、大和が自分で跳んだからある程度威力は殺されてる。アッパーも片足浮いた状態からの手打ちだ。マウントを取りに行かないのはグラウンドは分が悪いと思ってるから、ダメージが軽い間は追い打ちしたくない筈」

風間の疑問に百代が答え、大和が起き上がろうとしないのはグラウンドに誘いつつ、追い打ちに来なくても時間を稼ぐ事が出来るからだと続ける。

（それよりハゲの反応速度だ。多分ドーピングによる効果だろうが……今の直江じゃ勝つのは厳しいか？）

（警戒して追い打ちに来ない。…予想通りグラウンドは得意ではないようだ）

おかしい事があった。至近距離からの頭突きを躱した反応速度と、手打ちとは思えない威力のアッパー。頭突きを躱すだけなら読まれていたと考えただろうが、パンチの威力は説明出来ない。

（……ドーピングか）

それも恐らく中枢神経を興奮状態にさせるタイプ。痛みに鈍感になり、異常な集中力と筋力を発揮する。効果時間は分からないが、一気に攻めて来ない事からそれほど短くはない筈。殴り合いでは確実に勝てないだろう。"金剛"は望み薄、"煉獄"も反則で使えないし

綺麗に入らないだろう。

（……まっ、イケるだろ）

反撃への策を講じた大和は立ち上がる

（足取りがしっかりしている。やっぱ浅かったか）

血の混ざった唾を吐き捨て立ち上がる大和を観察し、井上はダメージが軽いモノであると確信する。

（ドーピングが効いている間に倒すのが理想的だが、焦りは禁物だ。徐々に削っていく戦い方を心掛けろ！）

フットワークを刻みながら井上は大和に殴り掛かる。殴り合いでは勝てないと判断している大和は防御に徹する。頭部へのダメージを避ける為ガードを上げているが、井上は的確に空いている腹部に拳を打ち込んでいく。

（早くガードを下げろ、すぐに楽にしてやるからよッ!!）

「おいおい、滅多打ちじゃねーか。早く止めた方が良いんじゃねーのか？」

誰かが呟いたその台詞は、決闘を観戦している殆どの者の感想だった。ギャラリーは既に大和の負けだと思っている。防戦一方で時折繰り出す攻撃も当たらない。勝てる要素が見当たらないのに、それで

も立会人たる川神鉄心は決闘を止めない。まだ戦えると判断している、まだ勝敗は決まっていないと考えている。その最大の理由は…

『アイツ、笑ってやがる』

（…もう少し、もう少しで反撃出来る）

徐々に攻撃する頻度が減り、耐える時間ばかりが増えていく中、大和は反撃の機を窺っていた。

（釈迦堂のオッサンと比べれば、カスみてーなパンチなんだよ！）

自分を鼓舞し耐えるものの、井上は無慈悲に拳を打ち込んでいく。そして…

大和の腹部に井上の拳が突き刺さり

リングの中央から少しコーナーへ下がった

腰が砕けた大和は井上の袖と胸倉を掴む

（――――"無極"）

『すみませんでした』

『勘弁して下さい』

『助けて下さい』

（――――――ぶっ殺す!!）

一瞬だけの馬鹿力。一方的に攻めていた井上は大和の突然の馬力に堪えきれず、巴投げを決められる。背中を地に着けられ、慌てて体勢を整えるべく膝をついて立ち上がろうとする。だが、先に立ち上がった大和が邪魔をするように前蹴りを繰り出す。膝立ちで動けない井上は、両腕でガードするもコーナーに叩きつけられる。

（殴り合いで勝てないなら、殴らせなければいいだけだろうが！）

防戦一方だった者の突然の反撃

先程まで関心を失くしていたギャラリー

掌を返すように沸き出すが

彼等はすぐに静まり返る事になる

井上は空気椅子のような体勢のままコーナーに押さえ付けられている。前蹴りを繰り出した大和は足を引かず、脚力と体重を使って井上を鉄柱に押し込み続ける。

（なんて脚力だよ…力が入らない中腰じゃびくともしねえ。コーナーから脱出しないと反撃すら出来ない。直江が足を引いた瞬間に…!?）

呼吸が落ち着いてきた大和が井上の顎を蹴り上げる。足を引かず、膝から下を振るように使い井上の顎を蹴り上げた足は視界を強引に

上に向かせる。死角を作る事に成功した大和は、心臓を蹴る為に足を素早く引いた。

『心臓を狙った打撃は絶対防いで下さい』

大和は蹴りによる"金剛"を放つ！が、予め(あらかじ)"金剛"を警戒していた井上のガードに防がれる。

「チッ！」

(危ねえ、心臓に喰らったら1発で気絶しちまう。興奮剤が効いてるから痛みはあまり感じないが、このまま蹴りを喰らい続けるのは…!?)

「オラァッ!!」

"金剛"を警戒されていると確認した大和は攻め方を変える。井上に立ち上がる隙を与えないように前蹴りを連続で繰り出す！狙いを絞らせないよう顔面と心臓にランダムに蹴りを繰り出し、心臓のガードを外せない井上にダメージを与えていく。顔面に蹴りが当たる度に鉄柱に頭部が叩きつけられる為、後頭部を強く打ってしまう。しかし、後頭部を直接蹴っている訳ではないので反則とは言えない。興奮剤を服用している筈の井上は徐々にダメージを自覚していく。

(ま…まず…い)

「俺に殴り掛かっといて簡単に寝てんじゃねえ!!ぶっ殺すぞ、テメェ!!」

威喝しながら蹴りを放ち続ける大和。叫ぶ事で相手を萎縮させ、自らはシャウト効果による筋力発揮を行う。1発蹴られる度に井上の

顔面から鮮血が飛び、腰が落ちる。尻餅をつけば反撃は更に困難になり、川神鉄心が止めるまで蹴られ続ける事になる。状況を打破する為には蹴りを封じ、コーナーから脱出するしかない。井上は取り敢えず大和の蹴り足を掴み、蹴りを封じようとするが…

大和は掴まれた足で井上に体重を掛け

軸足で井上に向かって跳躍

軸足の膝蹴りが顔面を潰し

ズルズルと尻餅をついてしまった

しかしこの戦いに１０カウントは無い

大和は続けて膝蹴りを放とうとする

（…こ……怖ぇ……）

「それまでッ!!!」

『生兵法は大怪我のもとって言うだろ。止めとけ止めとけ、お前らじゃ勝てねえよ』

『拳闘じゃなくてヴァーリトゥードなんだろ？絶対に怪我するから』

（先程までの圧倒的優位が夢だったとすら思えてしまう。完全に直江大和を侮っていた。釈迦堂さんの言った通りだ戦うべきじゃなかた…）

決め技を警戒し、ドーピングした程度では覆せない差があった。直江大和は想定以上に強く、狡猾だった。親が外道だったからと腐っていた私達が敵う相手ではなかった!!

(すみません、準!私の我儘に付き合ったばっかりに!!)

葵はこれ以上戦わせるのは危険と判断し、タオルを投げようとするが…

それより先に鉄心が止めに入った

「勝者、直江大和!!」

ハゲは撲殺四散!「インガオホー」

作戦名『飲むなよ、絶対飲むなよ！』

忍足あずみ
川神学園2年S組所属
九鬼英雄専属のメイド。英雄の身の回りの世話は勿論、いざとなれば護衛もこなす万能メイド。小太刀や暗器、鎖帷子（くさりかたびら）による防具、ドーピングによる身体能力の強化等、実戦で本領を発揮するメイド？スリケンジツも使えそう。個人的には作中トップクラスの心労がかかるポジションだと思ってる。
２９歳、元傭兵、処女、ＰＰＡ（ペタンペタン姉貴）。

２００９年５月８日（金）　夜
葵紋病院

決闘で負傷した井上は、自らの父親が副院長を勤めている葵紋病院で検査を受けた後、葵冬馬と今後の方針を話し合っていた。

「とりあえず2週間は安静にしていろだとさ。脳波に異常は無かったが、後頭部を打ってるし鼻骨も折れてる。暫くは体育も見学だな」

「後遺症が無かったのは不幸中の幸いでしたね。……すみませんでした、準。釈迦堂さんの忠告を素直に聞いていれば…」

「いや、正直俺も直江があそこまで強いとは思ってなかった。負けちまった以上、足を洗った方がいいのかもしれない。俺達に裏の世界は荷が重かったんだ」

（だが、親父達が素直に認めるとは思えない。何かしら考えないと…）

「そうですね、その件で相談したい事があるんです」

「……？」

「英雄に…いや、九鬼に頼るのはどうでしょう？」

２００９年５月８日（金）　夜
親不孝通り

治安が悪く、ガラの悪い奴等の溜まり場として有名な親不孝通り。チンピラ共が増えてくる時間帯にもかかわらず、一際目立つ格好の女達が見回っている。その女達はメイド服に身を包んでおり、３人共美人だが誰も絡まない。週末の夜、最も人が集まるであろう日なのに、やけに人通りが少なく静かである。

「李、ステイシー。そっちはどうだった？」

「噂に聞いていた程ではないですね。出回りそうだった薬も全て回収しましたし、後は定期的に九鬼の従者部隊で見回っていれば問題無いでしょう」

「ほーんと、ガッカリだぜ。どいつもこいつも格好だけは一丁前に悪ぶりやがって。ファック！」

「確かに薬は全て回収したが、何かおかしい。週末なのに人通りが異常に少ないし、何よりガラの悪い連中の様子が気になる。怪我をしている奴が目につくし、皆足早に去っていく」

「川神院から聞いた話では、ここら一帯を牛耳っていた板垣と釈迦堂元師範代がいなくなった筈。他の連中がこれを機に活発に動きそうですけど…」

「考え過ぎじゃねーのか？単に自分達だけじゃ何も出来ないってだけだろ」

「いや、絶対におかしい。武士道プランが実行に移る前に不安要素は可能な限り潰す。情報を急いで集めろ、多少手荒い方法でも構わない」

「了解しました」

「チッ、面倒くせーな」

２００９年５月８日（金）　夜
島津寮１０２

葵との決闘に勝利した大和は、早速ジムを使わせてほしいと連絡していた。

「ああ、１日でも早く利用したい。明日から利用できるようにする事は可能か？」

『ええ、大丈夫です。ただ、初日は顔見せの為にも私が付き添う必要があります。明日利用するならこちらにも都合がありますので、時間は私が指定しても構いませんか？』

「了解した。出来るだけ早い時間帯にしてくれると有り難い」

『分かりました。それでは明日、午前９時に駅前に来て下さい』

「分かった。後は明日、直接会って確認する」

返事を聞かずに通話を切り、携帯を布団に投げ捨てた大和はゆっく

り息を吐く。

（まずは訓練できる場所を確保できた。さっき聞いた話じゃ、俺以外にも数人程度なら利用させてもらえそうだ。順調に進んでいる）

確かに俺は強くなっていた。それはここ数週間の戦いで充分実感出来た。だが、川神百代にはまだ届いていない。これ以上強くなるにはもっと本格的な環境が必要だったが、それも手に入れた。協力者はまだまだ足りないが、当てならある。俺はまだまだ強くなれる。

相手は今や、世界中の格闘家を倒し続けている武神。その差はまだ離れている。

だが…

（あの頃よりは離れていない）

相手は最強と名高い武神。それでも…

（確実に近づいている）

「…ぶっ殺してやる」

２００９年５月９日（土）　早朝

島津寮　居間

待ち合わせ当日。日課の鍛練を終えた大和は汗を流し、居間でドリンク片手に考え事をしていた。

（今日は俺１人で行くとして、明日はどうしようか…）

不死川は賭けの件もあるし付き合ってくれるだろうが、アレでも不死川家の御令嬢だ。土日は用事が入る可能性が高い。平日に短時間付き合ってもらった方が良いか？となると土日はワン子に付き合ってもらうか。

（何にせよ、アイツらの都合次第だな）

「おはよう、大和。今日は一段と早いな」

「おはよう、クリス。今日はこれから出掛けるんでな。クリスはこれから鍛練か？」

「ああ。1日サボると取り戻すのに3日はかかると言うからな。毎日続ける事が大切なんだ」

（そういえば、クリスから話しかけて来るのも久しぶりだな。珍しい…）

クリスとは険悪とまではいかないが、俺が何かにつけからかう為、用が無い限り向こうから話しかけて来る事は無かった。それこそ転入して来た日以来だ。

（…もしかしたら気を遣われたのか？）

昨日の決闘が終わってから、周囲の人間の俺に対する反応が一変した。具体的には以前より距離を置くようになった。俺の性格を知っている風間達や、バイト仲間のゲンさんの態度は変わりないし、無視されたり嫌がらせを受けている訳でもないので、むしろ都合が良いとすら思っている。しかしクリスがそんな事知る筈もなく、周りの態度が急に変わった俺に気を遣って声をかけて来たのかもしれない。

（無意識にしろ意識的にしろ、気を遣ってもらうのはやっぱり嬉しいもんだな…）

「ところで大和はさっきから何を飲んでいるんだ？」

大和が飲んでいるドリンクは容器で中身が見えない。約1リットル程の大きさの容器に入ったドリンク。大和がさっきからちょくちょく飲んでいるのでクリスは少し気になった。

いや…

気にしてしまった…

それが喜劇を生み出す原因になる事を彼らはまだ知らない

「これか？これはプロテインやらヨーグルトやら混ぜたドリンクだよ。少しでも筋肉が太くなるように運動前に飲む事にしてんの。飲んでみる？」

「いいのか？ありがとう大和！」

大和から容器を受け取り、クリスはストローに口をつける。いわゆる間接キスだが、クリスに気にしている様子がない為大和も気にしない事にした。

（ヨーグルトと複数のフルーツの味。プロテインの粉っぽさも気にならないし…）

「これは美味しいな！」

クリスの笑顔が眩（まぶ）しい。自分でも珍しく良い事をしたと大和は

思った。

（たまにはこういうやり取りも良いな…）

「気に入ってもらえたなら良かった。なんならクリスの分も作っといてやろーか？」

「本当か!?」

「ああ、出掛けるまでまだ時間がある。鍛練が終わったら飲むといい」

「ありがとう、大和！それでは自分は鍛練をして来る」

（さて、それではササッと作りますか）

我ながら珍しくからかう事もなくやり取りを終えたものだ。まあ凄く嬉しそうだったからいいけど。

冷蔵庫を開き材料を取り出す。

（ブルガリにリンゴジュース、オレンジジュースに…）

そして彼はソレを見つけた。

黒烏龍（ウーロン）

『やあ（＊・ω・）ノ』

ウィダーインダイズペプチド

『俺達も…』

午後紅茶

『忘れてもらっちゃ困るぜ！』

大和は悪魔のレシピを閃いた!!

（…いやいやいやいや、流石に今日はイカンでしょ!?）

一瞬脳裏を過った悪魔のレシピを必死に振り払う。

（気を遣われた後に激マズドリンク飲ませるなんて悪戯、人として最悪だ。どうかしてる）

しかし、1度思いついた悪戯を試す事なく忘れるのは嫌なのか、大和は未練がましく思考を続ける。そして、最近自分のドリンクを勝手に飲んでいるであろう男がいた事を思い出した。

（……クリスやクッキーに手伝ってもらえばイケる！）

幸い今日はクリスの機嫌も良い。理由を話せば協力は難しくても反対されないように説得する事は出来るだろう。アイツの奔放な振る舞いに対する罰を下す絶好の機会だ。絶対に逃さない！

「……天誅を下してやる」

風間翔一という男は、元来自分の欲に従って行動する性分である。他人に左右されないその姿勢は多くの人間に好感を抱かせ、その行動力は束縛を感じている者には風の如く映る。

しかし、その奔放な性質は時として他人の不興を買ってしまう。

「…成る程。確かにキャップの振る舞いは礼儀を欠く時がある。1度痛い目に合わせて説教しなければと思っていたからな」

「協力してくれるか？」

「ああ、しかしキャップは勘が良い。危険を感じて回避されたらどうする？」

「それについては問題無い。フリを使って飲まざるを得ないよう追い込む」

「フリ？」

「簡単に言えば『押すなよ、絶対押すなよ！』ってヤツ。クリスが風間に一言『飲むな』と言ってくれれば成功するように準備してるから」

「そんな事で飲むかな？」

「まあ見ていろ。仕込みは既に終わっている。俺はこれから出掛けないといけないから、事が終わった後の説教は任せたぞ」

「分かった、気を付けて行ってこい」

「マイスター、朝だから早く起きて」

クッキーの声で脳が覚醒を始める。平日だったらダラダラと粘るところだが、生憎今日は休日。時間を無駄に消費してはならぬと起き上がる。

「おはよう、マイスター。出来ればいつも今日みたいに起きてくれると助かるんだけど」

朝イチの小言に適当に返事しつつ、今日の予定を考える。今日はファミリーの大半が予定があったから自由に時間を使える。

（さて、どうしようかねぇ…）

「そういえば大和から伝言を頼まれてたんだけど『俺のドリンクを勝手に飲むな』だって。人の飲食物に手を付けたら駄目でしょ！」

「あ～、やっぱりバレてた？」

何も言われないのを良いことに、ここ数日大和のドリンクを勝手に飲んでいたがやっぱりバレてたようだ。大和の奴は目敏(めざと)く頭が良いから当然か。何にせよ釘を刺されてしまった。次勝手に飲めば何らかの制裁を受けかねない。今後は控えるしかない。

居間に行くとクリスがちょうど出てくるところだった。どうやらクリスにも言っていたらしく、「人の飲食物に手を付けるな」と言われてしまった。この様子ではまゆっちや京にも言っているのかもしれない。何だか孤立した気分だ。

「今日はどうするんだ？」

クリスにまだ決めていないと返し、クッキーのように小言を続けられる前に別れる。今日は寮に残らず外を散策しよう。決して逃げたわけでは無い。

何かないかと冷蔵庫を開ける。

中には大和が使っているシェイカーの容器が二つ。ご丁寧に『飲むな！』とラベルが貼ってある。

（これはかなり警戒されてんな…）

しかし甘いぜ、大和。飲むなと言われようと、俺は飲むのを止めねえ！むしろ益々飲みたくなってきたぜ！

風間翔一という男は自由を好む。自分の欲望に従って行動し、自分の欲を満たす。誰かに言われたくらいで変わるような男ではない事を大和は知っている。風間の反骨心を上手く煽る事に成功する。しかし、それだけでは風間に罠（トラップ）を飲ませる事はできない。

（後でまた小言を言われるだろうが知った事じゃねえ。今飲みたいから飲む！それだけだ）

二つ作ってあるし一つくらい飲んでもいいだろ。

容器を二つ使った理由は二つある。一つは、二つあるから一つ飲んでも一つ残るからと飲む気を煽る為。少しくらいなら…という心情になるように。勘が良く、豪運を誇る風間を罠にかけるには行動を操る必要がある。自分の行動に疑問を抱かせないように、自覚なく罠を張っている道を進ませる。

手前の容器を手に取り飲もうとするが、口を付ける直前に異臭を感じた風間は飲むのを止める。

（この匂いは香辛料か⁉危ねえ、変なモン飲むところだったぜ）

匂いが強い香辛料を使った方は囮。敢えて危険性を感じさせ、もう

一つの容器を手に取らせるのが目的。当然囮といってもこれ自体も相当不味い。しかし、風間に飲ませるには勘の良さや豪運を掻い潜る必要がある。だから大和は風間に自分を出し抜いたと思い込ませるような罠を張った。

（もう一つの方はどうだ？）

慎重に容器を観察する。刺激臭はせず、乳製品の香りがするだけ。用心しつつ口をつけるが特に変わった様子はない。

（これはブルガリ？クッキーの言い方からいつものドリンクを作っているものだと思ってたが…）

そして風間は答えに辿り着く。

（…!?そうか、そっちに隠したのか）

大和がいつも使っているシェイカーの容器には罠と思える液体とブルガリが入っていた。罠の方はともかく、ブルガリの方は入れる必要が感じられない。しかし、ドリンクを作っているのなら隠す必要がある。その為にブルガリのパックにドリンクを入れ、シェイカーの方に残っていたブルガリを入れた。風間はそう結論を出した。

容器を二つ使った理由は二つある。

一つは風間の飲む気を煽る為。

（ブルガリのパックにドリンクを隠したんだろ。こっちには『飲むな！』ってラベルは貼ってない。飲んでも言い訳できるぜ）

そして二つ目の理由は…

（いただきます！）

大和の策を上回ったと思わせ、風間の警戒心を解く為。

風間翔一が一日行動不能になりました。